論　文
ライフデザイン学研究 18
p.23-53（2022）

# 聖母マリアのカンティーガ（5）
## ― 無原罪御宿りの信仰 ―

Las cantigas de Santa María, V,
La piedad por la Inmaculada Concepción

菊　地　章　太
KIKUCHI Noritaka

**要旨**

カスティーリャ・レオン王国の王アルフォンソ10世は、カンティーガと呼ばれる詩歌を集成した。聖母マリアを讃えたその書物は『聖母マリア讃歌集』の名で呼ばれ、420篇におよぶ作品を収めている。抒情詩の表現にふさわしい文学言語として重んじられたガリシア＝ポルトガル語で全篇がつづられ、カンティーガのひとつひとつに曲が附されて楽譜が中世の記譜法で記してある。それぞれの場面を表した多数の挿画が写本をかざっており、いずれも13世紀イベリアの信仰と芸術を伝える貴重な遺産となっている。アルフォンソ王の宮廷にはキリスト教徒とともにイスラーム教徒やユダヤ人の詩人・音楽家が活動していた。学芸への愛好にあふれた環境のなかで、アラビア語の抒情詩やイスラーム音楽を取り入れつつ聖母のカンティーガが語り出されたのである。

本稿は『聖母マリア讃歌集』のなかから次の５つの主題を考察の対象とし、それにふさわしいカンティーガをいくつか選んで読み解いていくこころみである。第１章では聖母のカンティーガがめざしたものを明らかにし、詩の韻律形式とその抒情性の源泉を探った。第２章では聖母の奇跡を語るカンティーガを取りあげ、同じ主題をあつかったヨーロッパとほかの地域の文芸作品との比較をおこなった。第３章では聖母マリアの聖地にちなむカンティーガを取りあげ、当時の巡礼のありようを写本挿画の描写もまじえてたどった。第４章ではアルフォンソ10世の生涯を語るカンティーガをもとに、学芸への情熱を抱きつづけた王の挫折に満ちた歩みを詩句のなかに探った（以上前号）。第５章では聖母の祝祭のカンティーガをカトリック神学の視点から捉え、のちのスペイン・ポルトガルでさかんに信仰された聖母の無原罪御宿りの源泉を読み取る。以上の考察をもとに、聖母のカンティーガに現れた13世紀イベリアの信仰と芸術の諸相を明らかにすることをめざした。

**キーワード**：聖母マリア信仰　カンティーガ　ガリシア＝ポルトガル語　中世イベリア芸術
カトリック神学

*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科　Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒115-8650　東京都北区赤羽台1-7-11

# 第５章　無原罪聖母のカンティーガ

## １．聖母の純潔を讃える歌

マリアは聖霊によって身ごもりイエスを産んだ。福音書の物語がここからはじまった。神の恵みのもとで処女が子を宿すという奇跡が起きた。神の子を産んだ母への崇敬は徐々にさかんになっていく。そしてついにはマリアその人まで、神の恵みによって母アンナから生まれたという信仰が芽生える。アンナは肉のまじわりによらずに身ごもり、このときマリアは原罪をのがれて母の胎内に宿ったという。これを「無原罪御宿り」conceptio immaculataと呼ぶ。原語の意味は「けがれのない受胎」である。

もはや福音書の説くところではない。長い年月のあいだにはぐくまれた聖母の純潔への思いの強さがそこにある。無原罪御宿りはやがてカトリック神学における重要な教義のひとつとなっていく。けがれのないマリアの聖性を主張するこの信仰は、古くから教会暦のなかで大きな位置を占めてきた。そのため人々の信仰生活に深くかかわり、宗教美術や音楽、そして文学に多くの素材を提供しつづけている。

無原罪聖母の信仰は中世にさかのぼり、16世紀の対抗宗教改革時代のイベリアにおいてとりわけ盛行した。その萌芽というべきものはラテン教会の典礼のなかに求められる。このように信仰としては古くから伝えられてきたが、幾世紀にもわたる論争をへたのち、ローマ教皇庁がこれを教義として正式に認可したのは、1854年のピウス９世の勅書によってである。この勅書が発布されてから、カトリック世界では聖母の出現をはじめとする奇跡があいついだ[(1)]。ポルトガルのファティマ Fátima やスペインのガラバンダル Garabandalにおける聖母の出現もその延長線上にある。

『聖母マリア讃歌集』が編纂されたのは無原罪御宿りの信仰が高揚していくはるか前の時代である。もとより「無原罪」という言葉はカンティーガのなかにない。聖母にささげられた詩歌集ではあっても、当時の聖母神学とはなんら接点をもたないという見方もある[(2)]。しかしやがてイベリアでさかんになるこの信仰の萌芽をいくつかの歌に見いだせはしないか。そうであるならば『讃歌集』を聖母信仰史の大きな流れのなかに位置づけることができるにちがいない[(3)]。

カンティーガ413番はそのひとつといえる。これは聖母の純潔を讃えたカンティーガであって、無原罪御宿りを主題とするものではない、しかしこの信仰につながるさまざまな要素がうかがえる。以下にテクストと試訳を示したい[(4)]。

［題辞］

1　Esta terceira é da Virgĩidade de Santa Maria, e esta festa é no mes

2　de dezenbro, e feze-a Sant' Alifonsso; e começa assi:

この３番目［のカンティーガ］は聖マリアの純潔について語るもので、祝祭は12月におこなわれ、聖イルデフォンソがそれを定めた。次のようにはじまる。

［反復句］

| | | |
|---|---|---|
| 3 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を |
| 4 | *a virgĩidade de Santa María.* | 讃えなければならない。 |

［第 1 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 5 | Ca ela foi virgen ena voontade, | なぜなら彼女はその心においても肉体においても |
| 6 | e foi-o na carne con tan gran bondade, | 偉大な善良さとともに純潔であったから。 |
| 7 | por que Deus do ceo con sa deidade | それだから天の神は［かつて］持たなかった肉体を |
| 8 | en ela pres carne que el non avia, | その聖性とともに彼女のなかで得たのである。 |
| 9 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

［第 2 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 10 | Ond' ela foi prenne. Mas como x'ant' era | そのようにして身ごもったのである。しかし |
| 11 | ficou virgen, que foi maravilla fera; | 以前と同じく純潔で、至高の奇跡であった。 |
| 12 | ca tant' ouve door com［o］ant' ouvera | そのため子をもつ前にいだくのと同じ痛みを |
| 13 | que ouvesse fillo. Queno cuidaria | いだいたのである。誰が考えられるだろう。 |
| 14 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

［第 3 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 15 | Que aquestas cousas de sũu juntadas | このようなことがひとりの女性の体に |
| 16 | fossen e en corpo de moller achadas | 同時に起こるなどということを。 |
| 17 | que ouvess' as tetas de leit' avondadas | 乳房には乳があふれ、子をなして |
| 18 | e pariss', e fosse virgen todavia. | そしてなおも純潔であるということを。 |
| 19 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

［第 4 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 20 | Mas aquesta Virgen amou Deus atanto | だが神はこの処女を愛するあまり |
| 21 | que a emprennou do Espirito Santo, | 聖霊によって身ごもらせたのである。 |
| 22 | sen prender end' ela dano nen espanto; | 彼女は傷を受けたり恐れをいだくことなく |
| 23 | e ben semella de Deus tal drudaria. | 神の深い愛のしるしを受けたのである。 |
| 24 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

［第 5 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 25 | E desto vos mostro prova verdadeira | これについてあなた方に真実のたとえを示そう。 |
| 26 | do sol quando fer dentro ena vidreira, | 太陽［の光］がガラス窓に射しこむとき、 |
| 27 | que pero a passa, en nulla maneira | 光は通りぬけるが、［ガラスは］割れずに |
| 28 | non fica britada de como siya. | そのままで何も変わることはない。 |
| 29 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

［第 6 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 30 | Que macar o vidro do sol filla lume, | ガラスが太陽からの輝きを受け入れても |
| 31 | nulla ren a luz do vidro non consume; | 光はガラスをなんら損なうことはない。 |
| 32 | outrossi foi esto que contra costume | 同じように世のつねと異なり彼女は母であり |
| 33 | foi madre e virgen, ca Deus xo queria. | 処女であった。神がそう望まれたのだから。 |
| 34 | *Tod' aqueste mund' a loar deveria…* | この世のすべての者は聖マリアの純潔を… |

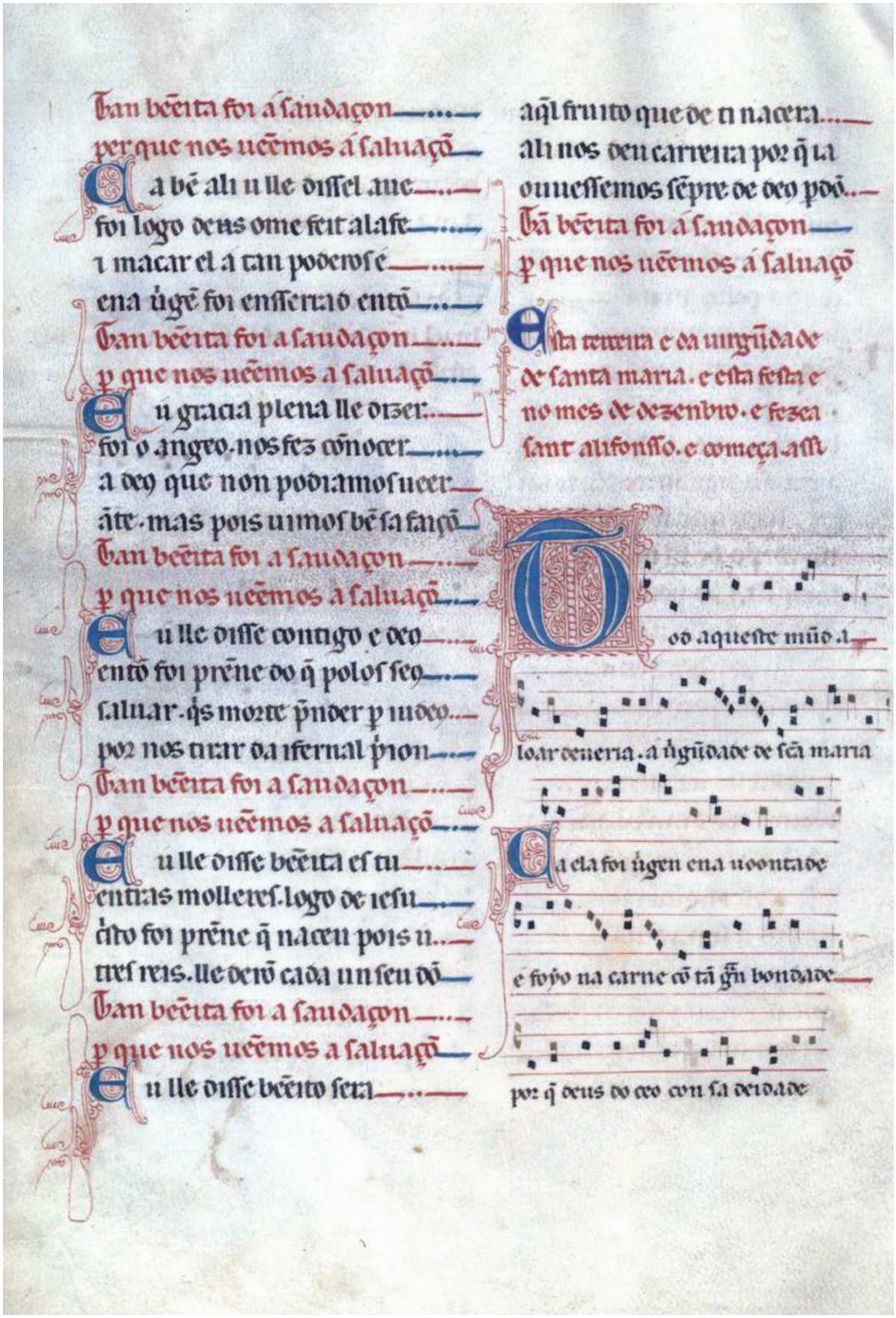
冒頭の題辞に「３番目」«terceira» のカンティーガであることが示されている。『讃歌集』のトレド写本Toでは、100篇のカンティーガを記されたのち、さらに聖母の祝祭のカンティーガ５篇、キリストの祝祭のカンティーガ５篇、奇跡のカンティーガ15篇が追加された。「３番目」とあるのは末尾15篇のうちの３番目に該当するからである。写本第139葉裏から140葉表を占め、139葉裏の第２列に楽譜が掲載され、140葉表の第２列末尾まで詩句が記される［図１］。エル・エスコリアル写本Eでは奇跡のカンティーガ15篇が冒頭に置かれており、写本第４葉裏から第５葉裏を占めている。いずれも挿画は含まれていない。校訂本では400篇のカンティーガのあとに追加されて413番に位置する。

２行目に «Sant' Alifonsso» とあるのはトレドの聖イルデフォンソ Hildefonsus Toletanusのことである。西ゴート王国時代のイベリアの教会を代表する聖者のひとりで、657年に王国の首都トレドの大司教となり、667年に没した。聖者の名はカンティーガ２番にも登場する。その題辞に「これはどのように聖マリアがトレドで聖イルデフォンソに現れ、ミサをおこなうとき着用する祭服を天から運んできて彼にさずけたのか」«Esta é de como Santa Maria pareceu en Toledo a Sant' Alifonsso e deu-ll' hũa alva que trouxe de Parayso, con que dissesse missa» とある。イルデフォンソが熱烈に聖母を崇拝するあまり、聖母はこれに感じて奇跡をおこなったという。

２番はつづいて、「彼は見事に言葉を用い、私たちが真実を見いだしたように、美しい書物を著して聖なる貴婦人の純潔について述べた。ユダヤ人と異端者らがおとしめたにもかかわらず、それによってマリアの賞讃はスペインにおいて回復された」«Ben enpregaou el seus ditos, com' achamos en verdade, e os seus bõos escritos que fez da virgĩidade daquesta Sennor mui santa, per que sa loor tornada foi en Espanna de quanta a end' avian deytada judeus e a eregia» と語っている[(5)]。

カンティーガの言葉のとおり、イルデフォンソは聖母の処女性 virginitasを疑う者を論破すべく、『３人の不信者に対する聖マリアの純潔についての小著』*Libellus de virginitate Sanctae Mariae contra tres infideles*を記してこれに報いた。そこには「マリアがつねに純潔であったことを認めない者たち、私たちの創造主を彼女の御子として認めようとしない者たち、また彼女を私たちの創造主の母として認めようとしない者たちは、私たちの神を彼女の御子と讃えることなく、さらにまた私たちの主を神と讃えることはないのだ」«Qui spernitis hanc esse virginem semper; qui non vultis esse factorem meum filium ejus, qui non vultis hanc esse martem factoris mei; qui contemnitis ut haec sola hunc habet filium, quem omnis habet creatura Dominum unum; qui non glorificatis hunc Deum filium ejus, Dominum meum non glorificatis ut Deum» とある[(6)]。この書物は古代教父の教えにもとづいて聖母の処女性を擁護したもので、イベリアにおける熾烈なまでの聖母信仰の原型（プロトタイプ）をそこに認めることができるだろう。

２番題辞の「祭服」«alva» のことは同時代の資料には語られていない。８世紀に書かれたトレド大司教シシラ Zixilaの『聖イルデフォンソの生涯あるいは事績』*Vita vel gesta sancti Ildefonsi*にはじめて登場する。聖者のもとに現れたマリアが「私の手からささやかな贈り物を受け取りなさい」«accipe munusculum de manu mea» と語って衣をさずけたとある[(7)]。この話は1276年に没した修道士ロドリーゴ・デ・セラート Rodrigo de Cerratoの『聖イルデフォンソの生涯』*Vita Sancti Ildefonsi* においてくりかえされた[(8)]。さらにゴンサロ・デ・ベルセオ Gonzalo de Berceoが13世紀に著した『聖母の奇跡集』*Milagros de Nuestra Señora*にも語られている。聖母がさずけたのは「糸で縫ってい



Tan beeita foi a saudaçon
perque nos ueemos a saluaçõ
Ca bẽ ali u lle dissel ave
foi logo deus ome feit alafe
i macar el a tan poderose
ena ũgẽ foi enssertado entõ
Tan beeita foi a saudaçon
p que nos ueemos a saluaçõ
Eu gracia plena lle dizer
foi o angeo. nos fez cõnocer
a deo que non podiamos ueer
ãte. mas pois uimos bẽ sa fançõ
Tan beeita foi a saudaçon
p que nos ueemos a saluaçõ
Eu lle disse contigo e deo
entõ foi prẽne do q̃ polos seo
saluar. q̃s morte p̃nder p uideo
por nos tirar da ifernal p̃ion
Tan beeita foi a saudaçon
p que nos ueemos a saluaçõ
Eu lle disse beeita es tu
entras molleres. logo de iesu
ẽdo foi prẽne q̃ naceu pois u
tres reis. lle deiõ cada un seu dõ
Tan beeita foi a saudaçon
p que nos ueemos a saluaçõ
Eu lle disse beeito seja
aq̃l fruito que de ti nacera
ali nos den carreira por q̃ ia
ou uessemos sẽpre de deo pdõ
Tã beeita foi a saudaçon
p que nos ueemos a saluaçõ
Esta terceira e da uirgũidade
de santa maria. e esta festa e
no mes de dezenbro. e fezea
sant alifonsso. e começa assi
Todo aqueste mũdo a
loar deueria. a ũgũidade de sẽa maria
Da ela foi ũgen ena uoontade
e fojo na carne cõ tã gẽn bondade
por q̃ deus do ceo con sa deidade

［図１］　トレド写本To第139葉裏（*Edición facsímile do códice de Toledo*, 2003）

ない祭服」«una casulla sin aguja cosida» であり、それは「人が織ったのではなく天使の仕事」«obra una angélica non de omne texida» だという[9]。

ベルセオはさらに語る。イルデフォンソは「3人の背教者に対して聖母の純潔についてすばらしい言葉で本を書いた。誠実なこの人はさらに別の務めをおこない、12月のなかばに聖母の祝祭を挙行した」«[Ildefonso] fizo d'ella un libro de dochos colorados de su virginidat contra tres renegados. Fizo-l otro servicio el leal coronado: fízoli una fiesta en deciembre mediado» という[10]。「本」«libro» のことはすでに述べたとおりだが、ここには12月の聖母の祝祭についても言及がある。

656年の第10回トレド教会会議において聖母の祝日が12月18日に定められた。これは聖イルデフォンソの主導のもとでなされたと考えられている。この慣習がスペイン国内の教会における伝統となった[11]。無原罪の祝祭もこのときおこなわれたとする意見もある。ただし教会暦に記載されたのは9世紀以降である[12]。現在の教会暦では無原罪の祝日は12月8日に置かれている。

くりかえすがカンティーガ413番は無原罪御宿りを主題としてはいない。とはいえここに表明されたマリアの処女性の主張は無原罪聖母の信仰につながっている。しかも12月に聖母の祝祭がおこなわれることを語っており、無原罪の信仰にかかわる接点が示されたのである[13]。

25行目以下に「ガラス窓」«vidreira» のたとえがある。これまた聖母の純潔を説くための修辞である。11世紀イタリアの神学者ペトゥルス・ダミアヌス Petrus Damianusが『主の御公現についての教説』*Sermo in Epiphania Domini*のなかでこのたとえを用いている[14]。ガラス窓といっても当時のガラス «vidro» はまだ透明ではない。教会のステンドグラスのような色のついたものだろう。

32行目に「同じように世のつねと異なり彼女は母であり処女であった」«outrossi foi esto que contra costume foi madre e virgen» とある。マリアは処女のままで母となり、それからのちも純潔でありつづけた。このことはのちにたどる別のカンティーガでくりかえされていく。

## 2．無原罪御宿りの神学

『讃歌集』の成立に先立つ12世紀の西ヨーロッパでは無原罪御宿りの信仰に対する反論があいついだ。フランスの修道士クレルヴォーの聖ベルナルドゥス Bernardus Claraevallensisは『リヨン聖堂参事会員への書簡』*Epistola ad canonicos Lugdunenses*のなかで、カトリックの教義にない無原罪の祝日をもうけることに懐疑をいだき、マリアが原罪をのがれて受胎したとする考えを否定した[15]。それはキリストによる罪のあがないの普遍性を重んじた結果であり、多くの神学者がこれに同調した。イングランドのカンタベリー大司教アンセルムス Anselmus Cantuariensisは『神はなぜ人となられたか』*Cur Deus homo*のなかで、マリアはキリストによってはじめて原罪から清められたとする[16]。これに対して弟子であるカンタベリーのエアドメルス Eadmerus Cantuariensisが異議をとなえた。

エアドメルスは『聖処女マリアの御宿りについての論考』*Tractatus de conceptione Beatae Mariae Virginis*のなかで、マリアは受胎の瞬間に聖霊によって原罪からのがれたと主張する。すなわち「御宿りにあっては他者のように自然の法則にしたがうことはないと思われ、まったくそれとは異なって人間の知性がおよばない神の力と働きにより、あらゆる罪との結びつきから解き放たれていた」«ita te non lege naturae ut alios in tua conceptione devinctam fuisse opinor, sed singulari et humano intellectui impenetrahili divinitatis virtute et operatione ab omni peccati adjunctione liberrimam»

という[17]。この著作は1125年頃の成立とされる。

これ以後、無原罪御宿りを擁護する思想がようやく影響力をもってくる。オクスフォード・フランシスコ会学派の神学者ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス Iohannes Duns Scotusは『命題集注解』*Ordinatio*のなかで、マリアがその存在のはじめから神の恵みによって原罪から解放されたと主張する。その際にキリストによる「あらかじめのあがない」redemptio praeservativaという従来と異なる救済論が前提に立てられた[18]。無原罪御宿りに関する神学論争はさらに継続していくが、同じころイベリアにおいても新たな動きがあった。

アンダルシアのハエン Jaénの司教を務めた聖ペドロ・パスクアル Pedro Pascualは1299年に『カトリック信仰に関するハエン司教のユダヤ人論駁』*Disputa del bisbe de Jaén contra els jueus sobre la fe catòlic*を著した。そこでは徹底して聖母の純潔を擁護し、無原罪の完全性を主張する。

パスクアルによれば、神の意志においてマリアは「[世界の] 創造の前から神の母として選ばれていた」«la qual Verge ans de la creació era ella electa esser mara de Déu» という。まずこのことを理解し信じなければならない。それだからこそ「神は特別な恵みによって彼女を死すべき原罪から、また純潔をそこなうあらゆるものから守ろうとした」«e aço feu Déu per gracia special, e volch la reservar del pecat original, lo qual es mortal, e de tota altra lesió e sutzura» のである。マリアが原罪のなかでその母の胎内に宿ったのであれば神に見捨てられたにひとしい。そのようことはあるはずもなく、「彼女は御宿りの前にも後にも神の恵みとそして愛のなかにいた」«mas que ans de la sua concepció e apres es estada en la gracia de Déu e en la sua amors» という[19]。

マリアはあらゆる汚れから守られている。この信念は旧約聖書『雅歌』（4章7節）の記述を踏まえたものである[20]。そこには「私の愛する人、あなたはすべてが美しく何の汚れもない」«tota pulchra es amica mea et macula non est in te» とある[21]。これは無原罪の聖母を象徴する1節として古くから引かれてきた。それを前提としつつもパスクアルの説くところは神学論文というより信仰告白と呼ぶべきものに近いのではないか。

スコトゥスが『命題集注解』を講じたのはパリ大学に移った1302年以後である。パスクアルの著作はこれに先んじているが、カタルーニャ語で記されたため受容の範囲に圧倒的な差があった。またスコトゥスの場合は御宿りに関する議論といえども聖母神学だけの問題ではなく、その前提に巨大な検討対象としてキリストの贖罪論がある。パスクアルの発言はイベリアの熱烈な聖母崇拝の風土から生み出されたところが大きいと思われる。彼はアルフォンソ10世の妻ビオランテの弟、トレド大司教サンチョ・デ・アラゴン Sancho de Aragón の師であった。あるいは『讃歌集』とも無縁ではなかったろう。

神学のいとなみを離れてみれば、文学のなかに無原罪の信仰につながるものが13世紀なかばのイベリアですでに現れていた。北スペインのブルゴス近郊サン・ペドロ・デ・アルランサ San Pedro de Arlanzaの修道士が書いたとされる『フェルナン・ゴンサレスの詩』*Poema de Fernán González*は、モーロ人すなわちイスラーム教徒との戦いを語る武勲詩 cantar de gestaである。1266年までに成立したとされ、そのなかに戦闘に臨んで神の加護を祈る言葉がある[22]。

| | |
|---|---|
| Señor, que con los sabios valiste a Catalina, | 主よ、カタリーナに知恵をもたらし、 |
| e de muerte libreste a Ester la reina, | 王妃エステルに死からの解放をもたらし、 |
| e de dragon libreste a la Virgen Marina, | 処女マリアに龍からの解放をもたらす主よ、 |
| tu da a nuestras llagas conorte e medeçina. | われらの傷になぐさめと薬をあたえ給え。 |

アレクサンドリアの聖女カタリーナはローマ皇帝がつかわした異教徒の賢者たちを改宗させた。これは10世紀に書かれたシメオン・メタフラスト Symeon Metaphrastesの『聖女カタリーナ殉教録』*Martyrium sanctae Aecaterinae*をはじめとする聖者伝に語られている[23]。エステルはユダヤ人の虐殺を命じたペルシア王の勅令を撤回させた。これは旧約聖書『エステル記』（８章３節）に語られている。

マリアが龍から解放されたというのは新約聖書『ヨハネ黙示録』の記事に由来する。ラテン語訳ヴルガータ（12章１節）には「天に壮大なしるしが現れ、太陽に包まれた女がいて足の下に月があった」«signum magnum paruit in caelo mulier amicta sole et luna sub pedibus eius» と語られている。女が子を産むと、龍が現れてこれを呑みこもうとした。子は天の玉座に引き上げられ、天使が龍に闘いをいどんだ。あげくは「その巨大な龍は投げ落とされた。悪魔ともサタンとも呼ばれて全世界をまどわす昔の蛇は地上に投げ落とされた」«et proiectus est draco ille magnus, serpens antiquus qui vocatur Diabolus et Satanas qui seducit universum orbem proiectus est in terram» とある[24]。

中世から一貫してこの「女」«mulier» は無原罪の聖母として理解されてきた。龍は悪魔であり「昔の蛇」«serpens antiquus» だという。これは旧約聖書『創世記』（３章１節以下）が語るところの、最初の人間に罪をもたらした蛇である。彼らの子孫はみなその罪、つまり原罪を背負っているが、無原罪の聖母はそこから解放された存在である。彼女は太陽に包まれ月の上に立ち、蛇を踏みつける姿で絵や彫刻に表されてきた。前の章で読んだカンティーガ367番に「たくらみに満ちた悪魔を踏みつけた彼女の力で［王は］癒やされた」«de que guariu por aquela que trilla mui mal o demo chẽo de perfia» とあった。これも無原罪聖母の形象にほかならず、『フェルナン・ゴンサレスの詩』の１節についても同じことが言える[25]。

13世紀のイベリアにおいて無原罪御宿りの信仰につながるものが詩歌に表明されていた。それを何よりゆたかに表明しているのは『聖母マリア讃歌集』ではないか。

### ３．マリアの誕生の物語

カンティーガ411番は聖母自身の生誕のありさまを語る。題辞に「これは１番目［のカンティーガ］であり、聖マリアの生誕について語るもので、祝祭は９月におこなわれる。次のようにはじまる」«Esta é a primeira, da nacença de Santa Maria, que cae no mes de setembro; e começa assi» とある[26]。聖母の祝祭をあつかう最初のカンティーガで、９月８日の聖母生誕の日にちなむ内容である。

福音書はイエスの生いたちを語っている。しかしその母の生い立ちは語らない。聖書の外典 apocrypha とされた『ヤコブ原福音書』*Protevangelium Iacobi*に記事がある。正典 canon とされた４つの福音書に遅れて、２世紀後半に成立したと考えられている。ギリシア語のテクストが伝わる。あるいは７世紀以降にラテン語に翻案した『偽マタイ福音書』*Pseudo Matthaeus Evangelium*が伝わ

る。いずれもカンティーガ411番にとって重要な典拠であろう。

411番のエストリビージョすなわち反復句（リフレイン）は「その日は祝福され、神の母なる処女が生まれたその時は幸いだ」«Bẽeyto foi o dia e benaventurada a ora que a Virgen Madre de Deus, foi nada» とある。つづいてマリアの父ヨアキムと母アンナの物語が語られる。ふたりの暮らしは裕福で恵み深かった。得られた物をいつも三つに分け、貧しい者にほどこし、ユダヤの神殿に納め、のこりを自分たちのものとした。しかし彼らには子がなかった。

ヨアキムが神殿に入ろうとすると祭祀がこばんだ。「あなたは神に呪われている。子がさずからないのだから」«pois de Deus es maldito, que te non quis dar fillo» と言われた。彼は傷つき、妻にも告げずに山へこもってしまう。アンナは子をもうけることもできず、夫には去られてしまい、いっそ死んでしまいたいと思った。しかしそうなってよいはずはない。なぜなら「神が大きな仕事を彼女にとっておいたのだから」«ca Deus pera gran cousa xa tiinna guardada» とある。

泣き伏しているアンナのもとに天使が現れた。神が祈りを聞かれたという。やがて「あなたの夫の娘」«de teu marido filla» を産むだろうと告げた。天使は去ってヨアキムのところに向かい、アンナが身ごもったことを伝える。傷心の男は容易に信じようとしない。天使とのあいだに問答がはじまる。神がふたりに子をさずけ給うたことを天使は告げる。生まれてくる子は「罪人になるであろう人々と神とのあいだを取りなす者」«que será avogada entre Deus e as gentes que foren pecadores» になると。そのうえでヨアキムにすぐに家にもどるように伝えた。

半年あまり山にいた夫がもどってきた。そのとき「ヨアキムは黄金の門を通って来るから、急いで迎えに行くように」«［fezera］que verria pela porta dourada, e que a el saysse reçebe-lo aginna» と天使がアンナに告げている。妻は今までの苦しみを忘れて夫に抱きついた。部屋をかたづけ料理をたくさん用意して待っていたのだ。その夜、アンナは無事に出産をむかえることができた。

ところで、これまでに原文を引いた箇所は先ほどあげた外典の書物に該当する文章がない。もしくは表現が異なっている。いずれもカンティーガの作者が加えたのである。たとえば、天使がアンナに子を身ごもったことを告げたとき、それは「娘」«filla» だとあかした。外典はそこまであかしていない。『ヤコブ原福音書』では、アンナは「子が男でも女でも、私の主である神へささげるものとしてさしだします」«e'án gennésō e'íte árren e'íte thēlu, prosázō au'tò dōron kuríō tō theō mou» と語っている[27]。『偽マタイ福音書』もほぼ同様の記述である[28]。カンティーガは外典の物語にしたがいつつ、これを増幅させて詩句を構成したのである。

ふたつの外典のうちカンティーガがより多く依拠したのはどちらだろう。山中のヨアキムと天使のあいだにかわされる問答は『ヤコブ原福音書』にはなく『偽マタイ福音書』に出ている。ヨアキムが帰還するとき「黄金の門」まで迎えにいくよう天使が告げているが、『ヤコブ原福音書』にはこのお告げはなく、「アンナは門のところにいた」«'éstē 'Ánna pròs tèn púlēn» とだけある。『偽マタイ福音書』では天使がアンナに「黄金［の門］と呼ばれる門へ行きなさい」«vade ad portem quae aurea vocatur» と命じている[29]。やはりここでもカンティーガはラテン語訳である後者にしたがったにちがいない。

411番は最後に神が受胎したその子を原罪から解放したことを語る[30]。

| | |
|---|---|
| E logo que foi viva no corpo de sa madre, | 母の胎内にいたとき、私たちの父アダムが、 |
| foi quita do pecado que Adan, nosso padre, | ［地獄の］扉は閉じているとそそのかされて犯した |
| fezera per consello daquel que, pero ladre | その罪から解き放たれたのだ。［悪魔が］私たちを |
| por nos levar consigo, a porta ll' é serrada. | いっしょに連れ去ろうとわめいたにもかかわらず。 |

マリアは母の胎内においてすでに原罪のくびきから脱したという。神学の書ではない詩歌の書がかえって堂々と無原罪の完全性を表明したのである。

このことは別のいくつかのカンティーガからもうかがえる。414番もそのひとつである。題辞に「これは４番目［の祝祭のカンティーガ］であり、聖マリアの三位一体について語る」«Esta quatra é da trĩidade de Santa Maria» とある。ここに言う「三位一体」«trĩidade» とは父と子と聖霊による神の三位一体ではなく、マリアにかかわるものである。マリアはヨセフにとつぐ前に純潔であり、とついでのちも純潔であり、子を産んで母となってからもずっと純潔であったという。すなわち「純潔であることの三つのありよう」«en tres guisas dua virgiidade» を意味する[31]。

あくまでも外典から展開した伝承である。福音書にはイエスの兄弟のことが記されており、マリアが処女でありつづけたという根拠はそこにはない（『マタイ福音書』12章46節、『マルコ福音書』３章31節ほか）。ところが外典ではすべてヨセフの先妻の子ということになっている。そうした設定のもとに、マリアの生涯にわたる純潔に最高の価値が置かれた。ここに彼女の三位一体が成り立つ基盤がある。そしてこのことが無原罪御宿りと分かちがたく結びついている。

マリアはその地上の生において純潔であっただけではない。アンナの母胎に宿ったその時から清められていた。そのことがカンティーガ310番に語られている[32]。

| | |
|---|---|
| Ca sempre santivigada | 彼女［マリア］は母の体のなかで |
| foi des que a fez seu padre | 父［ヨアキム］の子となった時から |
| eno corpo de sa madre, | ずっと聖なるものとされ、そこで |
| u jouve des pequenynna. | 彼女はとても小さいままでいた。 |

### ４．聖母の栄光のとき

マリアの聖性は御宿りの瞬間からさらに死後にまでおよぶ。カンティーガ419番にそれが語られている。題辞に「これは９番目［のカンティーガ］で８月の聖マリアの祝祭前夜にかかわり、どのように彼女がこの世を去って天にあげられたのかを語る」«Esta IX é da vigilia de Santa Maria d' agosto, como ela passou deste mundo e foi levada ao çeo» とある。８月15日の聖母の被昇天 assumptioの祝祭は古くから東方教会において「御眠り」koimēsisの名でおこなわれ、13世紀にはイベリアでも普及していた。

419番は冒頭に内容が要約される。「どのように彼女がこの世から［天へ］移ったかをあなた方に語りたい。そしてどのような仕方で神が天へともないに来たのかを」«como passou ela deste mundo contar vos quer', e en qual guisa a vẽo Deus levar consigo ao çeo» とある[33]。聖母が死後によみがえり、イエスにみちびかれ天に昇っていく。聖母被昇天の物語が以下に展開していく。これも福音書

に語られておらず外典にもとづいている。ギリシア語のテクストで伝わる『テッサロニキ大司教ヨハネによる聖処女マリアの御眠りの教説』*Iohannis archiepiscopi Thessalociensis sermo de dormitione beatae Mariae Virginis*とラテン語で伝わる『アリマタヤのヨセフの語りによる聖処女マリアの他界』*Transitus beatae Mariae Virginis, narratio Iosephi de Arimathaea*がその主要な典拠とされる[34]。

舞台はエルサレムである。聖母はイエスが十字架にかけられたあともここで暮らしていた。ある日、天使が棕櫚の枝をたずさえて現れ、三日後にイエスが来ることを告げた。使徒たちもみなやって来るという。聖母はオリーブ山で祈ったのち、身近にいた使徒のひとりヨハネを呼んでことの次第を語った。まもなくほかの使徒たちが雲に乗って到着した。ただトマスだけはそこにいなかった。使徒がそろって詩篇をとなえると、聖母は寝台に臥した。室内に芳香がただよい光に満たされた。そのとき神が聖母の魂をむかえに来たのである。

聖母の遺体は墓地に葬られたが、天使が大勢やって来て聖母を天に運んでいった。そこへトマスが来あわせる。聖母は天に昇っていくことを告げ、いぶかるトマスに帯を解いて投げあたえた。トマスは感謝し、帯を手にして町へ向かった。使徒たちは彼の姿を見つけると、聖母の臨終に間に合わなかったことをとがめた。トマスは聖母が天使に運ばれていくのを見たと告げ、そのときあたえられた帯を見せて言う。「自分が見たのは百合の花よりもっと白い聖母の体が天へと昇っていくところだった」«que eu vi o seu corpo mui mais branco ca lis ir sobind' aos çeos» と。

それでも使徒たちは信じようとしない。そろって墓を見に行ったところ、「光があるばかりで、探しても何も見つからなかった」«mais pero, se non luz, nulla ren non acharon» という。みなはトマスにわび、幾度も十字を切るのだった。

以上の物語はおおむね外典にしたがっており、ここでもギリシア語テクストよりもラテン語訳により多く依存している。ただいずれにも登場しない挿話もある。たとえば、聖母はわが子が十字架で息絶えたあと、「あまりの心痛を受けてたちまち四日熱をわずらい、回復することはなかった」«e logo tal pesar reçebeu que a fillou quartãa, que nunca en sãou» とある。それからずっとエルサレムに住んで病の人々を癒やしつづけた。だが自身の病からのがれることはなかったという。

天にあげられたのち聖母は神から冠をさずかり、天の后としての栄誉を受けることになる。これは次節であつかうカンティーガの語るところだが、マリアの聖性はその生涯の最後にいたって被昇天から天上の戴冠へと絶頂をむかえる。この419番は被昇天にいたる経過をたどりつつ、マリアが生前すでに清められていたことも語っている。それは臨終の母のもとにイエスが訪れたときのことだった[35]。

| | |
|---|---|
| Mais a ora da sesta, direi-vo-lo que fez | だが第六時［正午］に、この尊い処女の父であり |
| Deus, que foi Padr' e Fillo desta Virgen de prez: | 子である神が何をされたかをあなた方に語ろう。 |
| vẽo levar-ll' a alma, que el ja outra vez | 神は彼女の魂をともないに来た。かつてひとたび |
| lle metera no corpo u a santivigou. | その胎に入れ、そこで聖なるものとしたその魂を。 |

マリアは生前から死後にいたるまで聖なる存在でありつづけた。彼女の一貫した聖性がこうして讃えられたのである。

ここまで『讃歌集』のなかに無原罪御宿りにつながる詩句を読み取ってきた。それは信念と言って

よいものであり、同時代の神学にはるかに先んじていた。聖母を「貴婦人のなかの貴婦人」«Sennor das sennores» と慕うアルフォンソ10世にとって、けがれのないマリアの聖性は何より尊ぶべきものであったろう。無原罪の信仰が教義として認められるまでにはさらに幾世紀もの時間を必要とするが、すでにイベリアにおいてその先駆けとも言える文学が語り出されていたのである。

やがてイベリアはキリスト教国によって統一され新しい時代をむかえる。そのとき無原罪聖母の信仰がヨーロッパのどの国よりもさかんにおこなわれるようになった。イベリアこそ無原罪信仰の地と呼ぶことができる。それは信仰生活においても宗教芸術においてもあてはまるだろう。

セビーリャ出身の画家フランシスコ・パチェコ・デル・リオ Francisco Pacheco del Ríoはアンダルシアの芸術家や文人たちが師とあおぐ存在だった。没後の1649年に出版された『絵画芸術の伝統と偉大さ』*El arte de la pintura, su antigüedad y grandezas*のなかで、パチェコは無原罪御宿りの図像表現に関する規範の確立をめざした。そこにはマリアの純潔について「その受胎の最初の瞬間からそうであったのは、神の威厳と全能と、あふれる愛と深奥な智とを彼女のなかに現出させるためであり、原罪に染まることがないようにした」«porque lo fue en el primer instante de su concepción; puez hizo alarde en ella la majestad de Dios de su infinito poder, de su ardiente amor y profunda sabiduría, no dexando llegar la culpa original» と述べている[36]。

この確信に満ちた言葉は神学者ではなく芸術家によって語られた。ここから無原罪聖母を主題とした絵画や彫刻がいっせいに開花していく。それは今なおイベリアの教会のいたるところで目にすることができるだろう。

## 5．聖母の７つのよろこび

カンティーガ１番は聖母の生涯における栄光の場面を語りつつ、最後に天上における戴冠へと進む。以下にテクストと試訳を示したい[37]。

［題辞］

1　Esta é a primeira cantiga de loor de Santa Maria,
2　ementando os VII goyos que ouve de seu Fillo.
　これは聖マリアを讃える最初のカンティーガで、
　その御子によっていだいた７つのよろこびを語る。

［第１詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 3 | Des oge mais quer' eu trobar | 今このときから、私は尊ぶべき |
| 4 | pola Sennor onrrada, | 貴婦人のために詩を作りたい。 |
| 5 | en que Deus quis carne fillar | 神は彼女のなかで祝福された聖なる |
| 6 | bẽeyta e sagrada, | 肉体を得ることを望んだ。 |
| 7 | por nos dar gran soldada | 神の王国において私たちに |
| 8 | no seu reyno e nos erdar | 大きな褒美をあたえ、そして |
| 9 | por seus de sa masnada | 永遠の命にあずかる者として |
| 10 | de vida perlongada, | 私たちに受け継がせるため。 |

| | | |
|---|---|---|
| 11 | sen avermos pois a passar | ふたたび死を経なければ |
| 12 | per mort' outra vegada. | ならないことがないように。 |

［第 2 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 13 | E poren quero começar | それだから私は語りはじめよう。 |
| 14 | como foy saudada | どのように［大天使］ガブリエルから |
| 15 | de Gabriel, u lle chamar | 彼女が挨拶されたのかを。 |
| 16 | foy: «Ben aventurada | 天使は呼びかけた。「神に愛され |
| 17 | Virgen, de Deus amada, | 祝福された乙女よ。 |
| 18 | do que o mund' á de salvar | 世を救うべき方を |
| 19 | ficas ora prennada; | 今あなたは身ごもった。 |
| 20 | e demais ta cunnada | そしてあなたのいとこの |
| 21 | Elisabeth, que foi dultar, | エリザベトはあなたを疑ったことを |
| 22 | é end' envergonnada». | 恥ずかしく思っている」と。 |

［第 3 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 23 | E demais quero-ll' enmentar | さらに私は語っていきたい。 |
| 24 | como chegou canssada | どのように彼女が疲れはてて |
| 25 | a Belleem e foy pousar | ベツレヘムにたどり着き、 |
| 26 | no portal da entrada, | 町の門のなかに宿ったのかを。 |
| 27 | u paryu sen tardada | 休むまもなくイエス・キリストを |
| 28 | Jesu-Crist', e foy-o deytar, | 出産し、そこに寝かせた。 |
| 29 | como moller menguada, | 貧しい女性がするように、 |
| 30 | u deytan a cevada, | まぐさの桶のなかに子を |
| 31 | no presev', e apousentar | 寝かせて、厩の家畜たちの |
| 32 | ontre bestias d'arada. | あいだに休ませた。 |

［第 4 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 33 | E non ar quero obridar | そして忘れてはならない。 |
| 34 | com' angeos cantada | どのように天使たちが |
| 35 | loor a Deus foron cantar | 神を讃えて歌い、「地に平和が |
| 36 | e «paz en terra dada»; | あるように」と歌ったのかを。 |
| 37 | nen como a contrada | またどのように星が |
| 38 | aos tres Reis en Ultramar | 外国の三人の王たちに |
| 39 | ouv' a strela mostrada, | その場所を示したのかを。 |
| 40 | por que sen demorada | それで王たちはためらわずに |
| 41 | vēeron sa offerta dar | めずらしく高価な贈り物を |
| 42 | estranna e preçada. | 届けにやって来た。 |

［第 5 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 43 | Outra razon quero contar | また別のことを語りたい。 |

| | | |
|---|---|---|
| 44 | que ll' ouve pois contada | それはのちにマグダレナが彼女に |
| 45 | a Madalena: com' estar | 語ったことであり、どのように |
| 46 | vyu a pedr' entornada | 墓地の石が傾けられており、 |
| 47 | do sepulcr' e guardada | 天使に見守られているのを |
| 48 | do angeo, que lle falar | マグダレナが見たのかを。天使は |
| 49 | foy e disse: «Coytada | 語りかけた。「悲しんでいた女よ、 |
| 50 | moller, sey confortada, | あなたはなぐさめられるだろう。 |
| 51 | ca Jesu, que vẽes buscar, | なぜならあなたが探しに来たイエスが |
| 52 | resurgiu madurgada.» | 明け方によみがえったのだから」と。 |

［第 6 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 53 | E ar quero-vos demostrar | そしてまたあなた方に示したい。 |
| 54 | gran lediç' aficada | マリアが経験した大変なよろこびを。 |
| 55 | que ouv' ela, u vyu alçar | それは彼女の息子が光かがやく |
| 56 | a nuv' enlumẽada | 雲のなかへ昇っていくのを |
| 57 | seu Fill'; e poys alçada | 見たときのことだった。 |
| 58 | foi, viron angeos andar | 昇っていったあと天使たちが現れ、 |
| 59 | ontr' a gent' assũada, | 集まった人々のあいだを歩み、 |
| 60 | muy desaconsellada, | うろたえている人々に天使は言った。 |
| 61 | dizend' «Assi verrá juygar, | 「このように彼は裁きに来るだろう。 |
| 62 | est' é cousa provada.» | それは約束されたことなのだ」と。 |

［第 7 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 63 | Nen quero de dizer leixar | ここで言わずにすませたくはない。 |
| 64 | de como foy chegada | どのように神がもたらすことを望んだ |
| 65 | a graça que Deus enviar | 恵みがマリアにおとずれたのかを。 |
| 66 | lle quis, atan grãada, | それはなんとゆたかな恵みであり、 |
| 67 | que por el esforçada | それに力づけられたマリアによって、 |
| 68 | foy a compan［n］a que juntar | 神が召し出した仲間［使徒］たちは |
| 69 | fez Deus, e enssinada, | みちびかれていったのだ。 |
| 70 | de Spirit' avondada, | 彼らは聖霊に満たされ、 |
| 71 | por que souberon preegar | それによってその直後にすぐさま |
| 72 | logo sen alongada. | 教えをひろめることができたのである。 |

［第 8 詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 73 | E, par Deus, non é de calar | 神の名において語らねばならない。 |
| 74 | como foy corõada, | どのようにマリアが冠をさずけられたのかを。 |
| 75 | quando seu Fillo a levar | 彼女がこの世から去ったとき、 |
| 76 | quis, des que foy passada | 息子［イエス］が彼女を連れていった。 |
| 77 | deste mund' e juntada | 彼女は息子とともにあって、 |

| | | |
|---|---|---|
| 78 | con el no ceo, par a par, | 天においてともにならび、 |
| 79 | e reỹã chamada, | そこで彼女は后と呼ばれ、 |
| 80 | filla, madr' e criada; | 娘と、母と、はしためと呼ばれた。そういう |
| 81 | e poren nos dev' ajudar, | 方だからこそ私たちを救ってくださるのだ。 |
| 82 | ca x' é noss' avogada. | こうして彼女は私たちを取りなす方となった。 |

全体は8つの詩節からなる。第1詩節で「尊ぶべき貴婦人のために詩を作りたい」«quer' eu trobar pola Sennor onrrada» という決意を述べ、つづく第2詩節から聖母の「7つのよろこび」«os VII goyos» が各1詩節ずつ配される。

詩型は『讃歌集』の多くを占めるセヘルの形式と異なる。エストリビージョを持たず、1・3・6・9行目を -ar で脚韻する8音節の長さの行とし、2・4・5・7・8・10行目を -a で脚韻する短い行とする。これをすべての詩節にわたってくりかえしていく。

カンティーガ1番はエル・エスコリアル写本T（T.I.1）と写本E（j.b.2）とトレド写本Toに掲載されている。写本Tでは第5葉表から6葉表を占め、5葉表の第2列に楽譜が掲載され、つづいて5葉裏の第2列の末尾まで詩句が記される。6葉表に挿画が配され、通例とは異なって写本の1葉全部を使って8つの場面が展開する［図2］。これまでと同じように、1段目の向かって左を第1場面とし、4段目の右の第8場面へ進んでいく[38]。

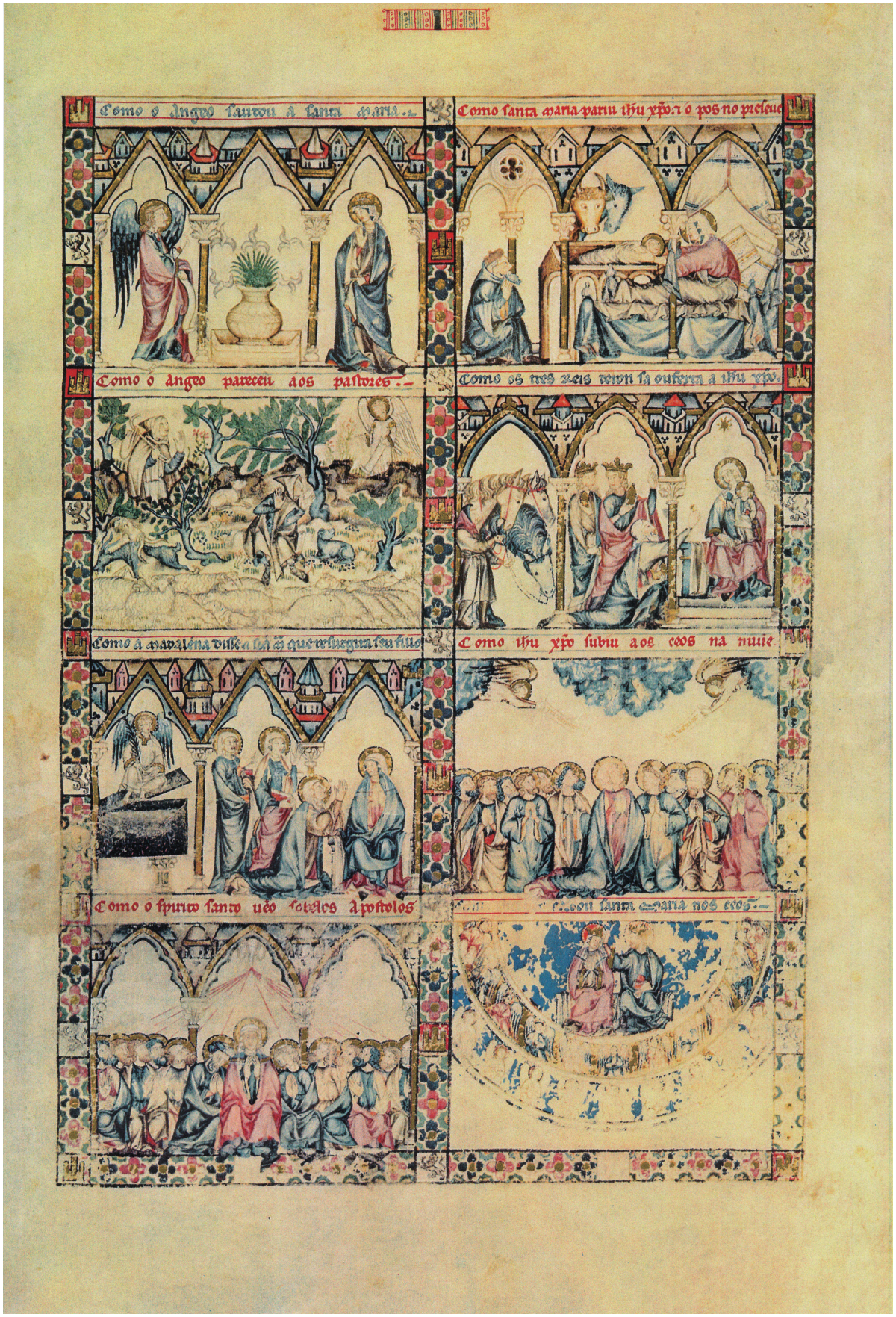
第1場面にはお告げの情景が描かれており、第2詩節の内容に対応する。室内が切妻アーチで三分され、向かって左に天使、右にマリアの姿がある。天使は右手をかかげて語りかけ、聖母は右手をかざしてこれに応えている。上段の文字は「どのように天使が聖マリアに挨拶したのか」«cómo a angeo saudóu a Santa Maria» とある。

第2場面には降誕の情景が描かれており、第3詩節の内容に対応する。室内が尖塔アーチで三分され、中央の飼い葉入れのなかに御子、右に寝台から身をのりだして手をさしのべるマリア、左に床にすわるヨセフの姿がある。上段の文字は「どのように聖マリアがイエス・キリストを出産し、まぐさ桶に寝かせたのか」«cómo Santa Maria paríu Iesu Christo e o pos no preseve» とある。

第3場面には天使が羊飼いに御子の降誕を知らせるようすが描かれており、第4詩節の前半の内容に対応する。この場面とつづく第4場面の情景は第4詩節にあわせて語られる。羊が草をはんでいるなかに2人の羊飼い、彼らが驚いて見上げた先に天使の姿がある。カンティーガには天使が神を讃えて歌ったとある。上段の文字は「どのように天使が羊飼いたちに現れたのか」«cómo o angeo parecéu aos pastores» とある。

第4場面には東方の3人の王による礼拝の情景が描かれており、第4詩節の後半の内容に対応する。室内が尖塔アーチで三分され、右に聖母子がすわり、中央に異国の王の姿がある。ひとりはひざまづいて贈り物を差しだし、ひとりは聖母子の頭上にかがやく星を指さしている。上段の文字は「どのように3人の王がイエス・キリストに贈り物をしたのか」«cómo os tres reis deron sa ouferta a Iesu Christo» とある。

第5場面にはキリストの復活をマグダレナが聖母に告げるようすが描かれており、第5詩節の内容に対応する。室内が切妻アーチで三分され、右に聖母、その前にひざまづいて手をあわせるマグダレ




［図２］　エル・エスコリアル写本T第６葉表（*Edición facsímil del códice T.I.1*, 1979）

ナの姿がある。左に蓋のあいた棺があり、かたわらに天使がひかえている。上段の文字は「どのようにマグダレナが聖マリアに御子がよみがえったと告げたのか」«cómo a Madalena disse a Santa Maria que resurgira seu fillo» とある。

第6場面にはキリストの昇天の情景が描かれており、第6詩節の内容に対応する。中央に聖母、その両脇に居ならぶ使徒たちの姿がある。そろって上空を見あげており、雲間にキリストの足だけが見える。その両脇から天使が降ってきた。カンティーガには「このように彼は裁きに来るだろう」«Assi verrá juygar» と告げた天使の言葉が記されている。上段の文字は「どのようにイエス・キリストが雲のなかで天に昇ったのか」«cómo Iesu Christo subíu aos seos na nuvẽ» とある。

第7場面には聖霊降臨の情景が描かれており、第7詩節の内容に対応する。室内が尖塔アーチで三分され、中央に聖母、それをとりまいて手をあわせる使徒たちの姿がある。聖母の上に白い鳩がいて、赤い光の筋を四方にそそいでいる。上段の文字は「どのように聖霊が使徒たちに臨んできたのか」«cómo o Spírito Santo vẽo sóbe los apóstolos» とある。

第8場面には聖母の戴冠の情景が描かれており、第8詩節の内容に対応する。半円の二重の枠のなかに天使が整列し、その内側で聖母に冠をつける玉座のキリストの姿がある。この場面は色彩の剥落がいちじるしく、外枠の天使は羽がかろうじて識別できる。上段の文字は「どのようにイエス・キリストが天上で聖マリアに冠をかぶせたのか」«cómo Iesu Christo coronóu Santa Maria nos ceos» とある。

以上のとおり、カンティーガ1番に語られ写本挿画に描かれた「7つのよろこび」の場面は、［1］お告げ、［2］降誕、［3］羊飼いへの知らせと3人の王の礼拝、［4］キリストの復活、［5］昇天、［6］聖霊降臨、［7］聖母戴冠であった。聖母の生涯におけるよろこびの場面、あるいはこれと対をなす悲しみの場面を観想し、詩歌に記し絵に描くことがおこなわれた。その際に選択される場面とその数は時代や地域によってさまざまだった。

12世紀のゴーティエ・ド・コワンシー Gautier de Coinciの『聖母の奇跡集』*Les miracles de Nostre Dame*は中世フランス語による「聖母の5つのよろこび」«Les cinc joies de Nostre Dame» を収めている。ここで語られるのは、お告げと降誕とキリストの復活と昇天と聖母戴冠である[39]。時代がくだると、洗礼者ヨハネの母エリザベトのもとへマリアが訪れる場面、幼な子イエスを抱いてエルサレムの神殿に詣でる場面（いずれも『ルカ福音書』に記事がある）などが加わっていく。これは現在もカトリック教会で受けつがれている。

14世紀にバルセロナに近い聖地モンセラート Montserratにおいて聖母を讃える詩歌集が編纂された。『朱い本』*Llibre Vermell*と通称され、中世カタルーニャ語による「聖母のよろこびのバラード」«Ballada dels goytxs de Nostre Dona» を収めている。ここで語られるのは［1］お告げ、［2］降誕、［3］3人の王の礼拝、［4］キリストの復活、［5］昇天、［6］聖霊降臨、［7］聖母戴冠である。［3］に羊飼いが登場しないことを除けば、記事はカンティーガ1番と変わりない。題辞に「7つのよろこびを数えあげ、敬虔な歌で心やさしい処女マリアをしずかに讃えたい」«Los set goytxs recomptarem et devotament xantant humilment saludarem la dolça verge Maria» とある。次のように歌われる[40]。

［第 1 詩節］
Verge fos anans del part pura e sens falliment
en lo part e' pres lo part sens negun corrumpiment,
lo fill de Déus Verge pia de vós nasque verament.
処女マリアよ、あなたは純潔でけがれなく身ごもり、
その前も後も罪に堕ちることがなかった。
神の御子はまことに敬虔な処女から生まれた。
［第 2 詩節］
Verge tres reys d'Orient cavalcant amb gran coratge
al l'estrella precedent vengren al vostr' abitatge,
offerint vos de gradatge aur et mirr' et encenç.
処女マリアよ、東方の 3 人の王がいさましくも馬に乗り、
星にみちびかれて、あなたのいるところにやって来た。
そしてあなたに黄金と没薬と入香をささげたのである。
［第 3 詩節］
Verg' estant dolorosa per la mort del fill molt car
romangues tota joyosa can lo vis resuscitar,
a vos maire piadosa primer se volch demostrar.
処女マリアよ、愛する御子の死を悲しんでいたが、
御子がよみがえったのを見て、よろこびがもどってきた。
恵み深い母であるあなたに御子は最初に現れようとした。
［第 4 詩節］
Verge lo quint alegratge que'n agues del fill molt car
estant al munt d'olivatge al cell lo'n vehes puyar,
on aurem tots alegratge si per nos vos plau pregar.
処女マリアよ、５つ目のよろこびは愛する御子からのもの。
オリーブ山で天に昇っていく御子をあなたは見たのだ。
あなたが祈ってくださるなら誰もがよろこびに満たされる。
［第 5 詩節］
Verge quan foren complitz los dies de pentecosta
amb vos eren aunits los apostols et decostsa,
sobre tots sens nuylla costa devallà l'esperit sant.
処女マリアよ、聖霊降臨の日のあとで、使徒たちと
ほかの人々はあなたとともにひとつになった。
欠けることなくみなの上に聖霊がのぞんだのである。
［第 6 詩節］
Verge'l derrer alegratge que'n agues en aquest mon

vostre fill amb gran coratge vos muntà al cel pregon,
on sots tots temps coronada regina perpetual.
処女マリアよ、あなたの最後のよろこびは地上にはない。
あなたの御子がいさましくもあなたを天にみちびいた。
そこであなたはいつも冠をつけている。永遠の后よ。

6つの詩節のなかに聖母の「7つのよろこび」«los set goytxs» が配された。最初の詩節にお告げと降誕があわせて語られている。『朱い本』の写本は1399年の成立とされるが、そのもとになった個々の詩歌はかなり古いものではないかと考えられている[41]。このバラードは題辞に «ball redon» という言葉が添えてある。これは輪舞（ロンド） rondeauのことで、フランスからもたらされた舞踏の形式である。短い詩型がくりかえされるのは舞踏の曲だったためか。あるいはアルフォンソ王のカンティーガに先立つ時代の姿を伝える作例かもしれない。カンティーガの表現はこのバラードにくらべてよほど洗練されている。それでいて聖母に寄せる信頼にはひたむきなものがある。天上で戴冠された聖母が「后と呼ばれ、娘と、母と、はしためと呼ばれた。そういう方だからこそ私たちを救ってくださるのだ」«reỹã chamada, filla, madr' e criada; e poren nos dev' ajudar» と語られたように。

## 6．信仰と芸術の一大集成

最後にカンティーガ120番を読みたい。これは『讃歌集』のなかで10番ずつ配された聖母の「讃美の歌」loor のひとつである。以下にテクストと試訳を示す[42]。

| | | |
|---|---|---|
| ［題辞］ | | |
| 1 | Esta é de loor de Santa María. | これは聖マリアを讃えるものである。 |
| ［反復句］ | | |
| 2 | *Quantos me creveren loarán* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう。 |
| 3 | *a Virgen que nos manten.* | 私たちをささえてくださる処女［マリア］を。 |
| ［第1詩節］ | | |
| 4 | Ca sen ela Deus non averán | 彼女がいなくては神にすがることもできず、 |
| 5 | *Quantos me creveren loarán* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう。 |
| 6 | nenas sas fazendas ben farán | よりよくことをなすこともできず、 |
| 7 | *Quantos me creveren loarán* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう。 |
| 8 | neno ben de Déus connocerán; | 神の恵みを知ることもないだろうから。 |
| 9 | e tal consello lles dou poren. | それだから私は彼らにこう助言しよう。 |
| 10 | *Quantos me creveren loarán…* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう…… |
| ［第2詩節］ | | |
| 11 | E con tod' esto servi-la-an | 何にもまして彼女につかえよう。 |
| 12 | e de seu prazer non sayrán | そのよろこびから離れることがないように。 |
| 13 | e mais d' outra ren a amarán, | ほかの何よりも彼女を愛そう。 |

| | | |
|---|---|---|
| 14 | e serán per y de mui bon sen; | そうすることで賢くいられるように。 |
| 15 | *Quantos me creveren loarán…* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう…… |

［第３詩節］

| | | |
|---|---|---|
| 16 | Ca en ela sempre acharán | なぜならば彼女のなかに大きな哀れみと |
| 17 | mercee mui grand' e bon talan, | すぐれた力を見つけられるだろうから。 |
| 18 | per que atan pagados serán | それによって心が満ちたりるあまり、 |
| 19 | que nunca desejarán al ren. | 何も望むことがなくなるほどだろう。 |
| 20 | *Quantos me creveren loarán…* | 私を信じる者は誰もが讃えるだろう…… |

わずか20行のカンティーガである。『讃歌集』でもっとも短いもののひとつで、短いだけになおのこと聖母を慕う思いがきわだっている。エストリビージョを１行ごとにくりかえす。アルフォンソ王自身の作と考えられる279番とまったく同じ詩型である。

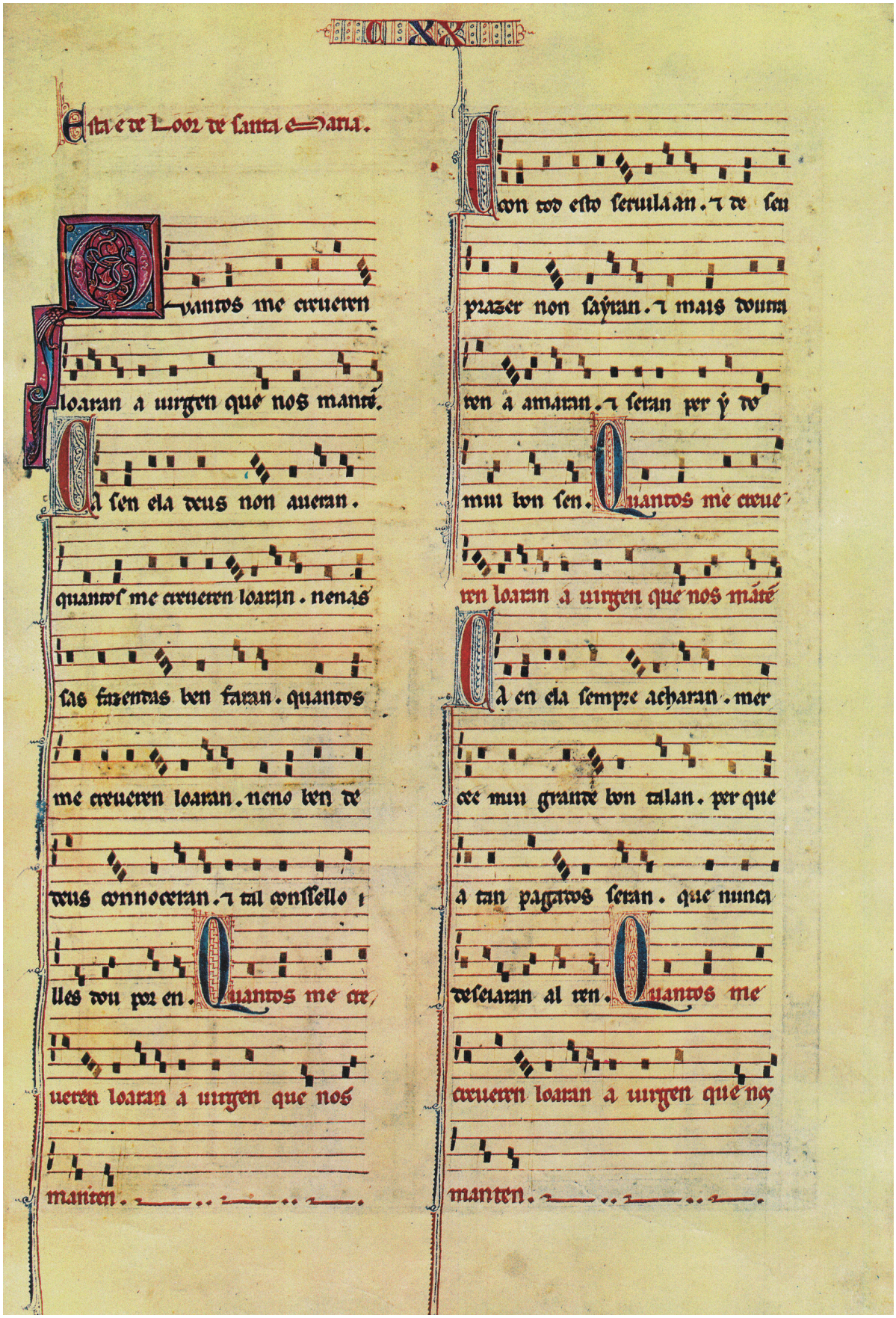
カンティーガ120番はエル・エスコリアル写本Tと写本Eに掲載されている。写本Tでは第170葉表の全面に楽譜が掲載され、詩句はすべて譜面に記してある［図３］。170葉裏に挿画が掲載され、１葉全部を使って６つの場面が展開する［図４］。

第１場面には聖母子の前でくりひろげられる奏楽と舞踏の情景が描かれている。右側に聖母子、そのかたわらにひざまづく王の姿がある。左側には楽器を奏でる人々と踊る人々がいる。手前に座った奏者はさまざまな楽器を手にする。膝の上に載せてかき鳴らす翼の形の撥弦楽器はサルテリオ saltérioとされる[43]。となりの四角い楽器も同様である。いずれもギリシアの琴プサルテリオン psalterion を起源とする。うしろに立った人が奏でるのは弓で弾くビウエラ vihuela de arcoである。３人で踊っているのは輪舞（ロンド）であろう。巡礼の道を通じてイベリアにもたらされたのか。

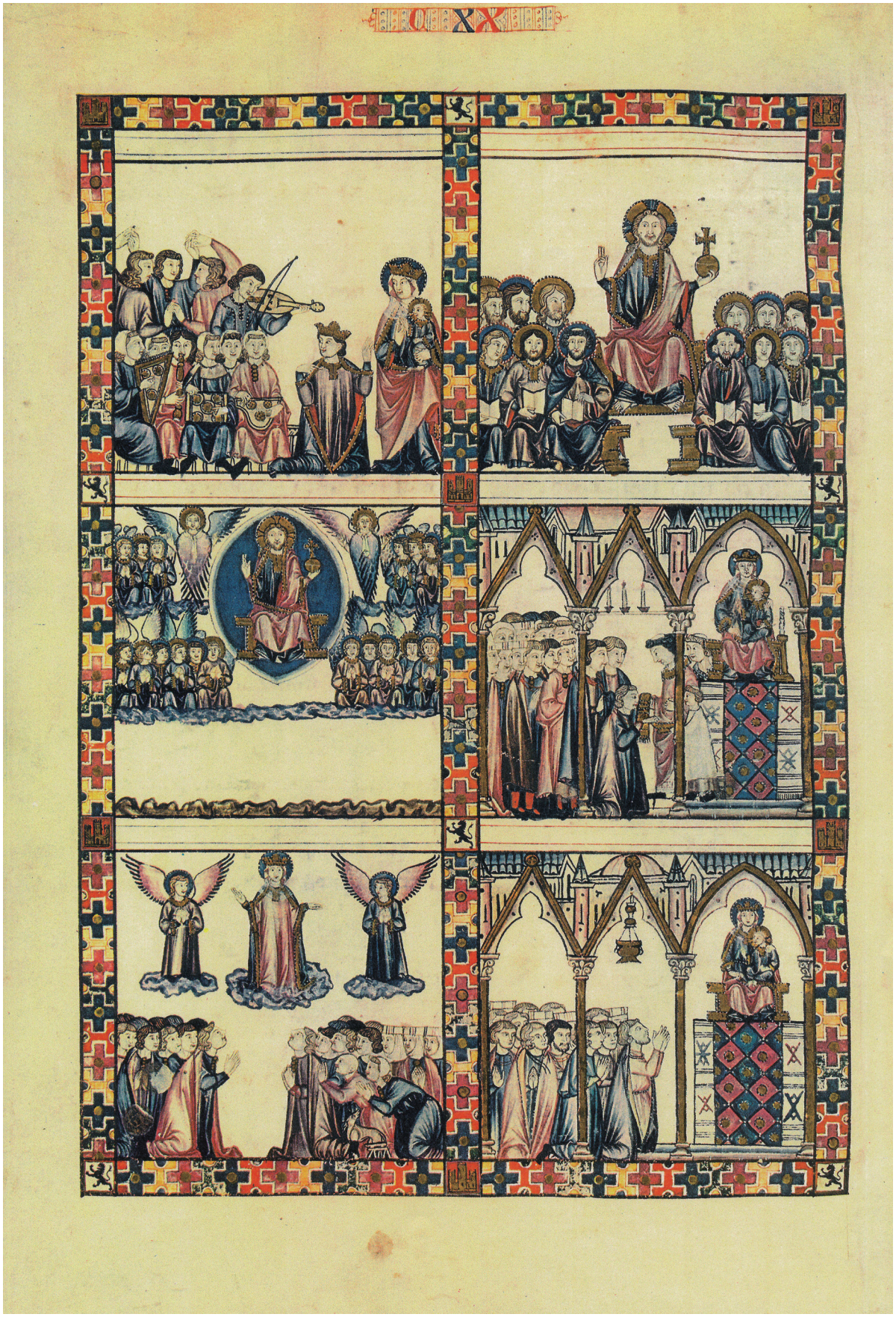
第２場面には玉座のキリストと使徒たちの姿が描かれている。第３場面にはキリストが後光 mandorlaに包まれ、最高位の天使セラフィム seraphimをしたがえて昇天するようすが描かれている。第４場面には聖母子像を礼拝する人々に聖職者が聖帯 stolaをさずけるようすが描かれている。この帯がやがて奇跡をもたらすのであろう。第５場面には聖母の被昇天の情景が描かれている。雲に乗る聖母はすでに冠をつけており、両脇に天にみちびく天使の姿がある。地上では人々が手をあわせてこの情景を見守っている。第６場面にはふたたび聖母子像を礼拝する人々の姿が描かれている。ここではすべての場面がカンティーガの内容とは直接かかわっていない。むしろこれまで述べてきた聖母信仰のもっとも大事なものが集約して示されたと言える。

カンティーガ120番は写本Eでは第125葉表の１列目から裏の１列目までを占める。冒頭に小さな挿画が添えられ、声を和して弦楽器を奏でるキリスト教徒とイスラーム教徒の姿が描かれている。写本Tの２葉とともに、あたかも聖母を讃える文学と音楽と美術がそこに凝縮したかのようである。

アルフォンソ王の宮廷にはイスラーム教徒やユダヤ教徒の学者や芸術家が招かれ、キリスト教徒とともに活動していた。学芸をたっとぶ王のもとで翻訳や著述がおこなわれ、詩が作られ曲が奏でられた。多くのカンティーガがそこから語り出され、見事な挿画にかざられた写本に記されていく。こうして『聖母マリア讃歌集』は中世イベリアの信仰と芸術の一大集成として私たちのもとに伝えられたのである。



［図３］　エル・エスコリアル写本T第170葉表（*Edición facsímil del códice T.I.1*, 1979）



［図４］　エル・エスコリアル写本T第170葉表（*Edición facsímil del códice T.I.1*, 1979）

## 注

（1）拙著『奇跡の泉へ ― 南ヨーロッパの聖地をたずねて』サンパウロ, 2006, p.192.

（2）José Guerrero Lovillo, *Las Cantigas de Santa María. Estudio auqueológico de sus miniaturas*, Madrid, 1949, p.25.

（3）Cristina Álvarez Díaz, "La doctrina inmaculista en las *Cantigas de Santa María* de Alfonso X el Sabio", Francisco Javier Campos y Fernández de Sevilla (dir.), *La Inmaculada Concepción en España: religiosidad, historia y arte, Actas del simposium, 1／4 -IX-2005*, II, Istituto Escurialense de Investigaciones Históricas y Artísticas, El Escorial, 2005, p.1222.

（4）cantiga 413: ms.To.III, fol.139vo-140ro; ms.E.III, fol.4vo- 5 vo; El maruqués de Valmar (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, II, Real Academia Española, Madrid, 1889, pp.573sq.; Walter Mettmann (ed.), *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, III, Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1964, pp.380sq.; id., *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, III, Editorial Castalia, Madrid, 1988, pp.332sq.

（5）Mettmann, *op. cit.,* ed. 1959, I, p.7; ed. 1986, I, p.59.

（6）Sanctus Hildefonsus Toletanus episcopus, "De virginitate perpetua Sanctae Mariae adversus tres infideles", *Patrologia latina*, XCVI, apud Migne editorem, Paris, 1862, col.107; cf. Juan Francisco Rivera Recio, *San Ildefonso de Toledo. Biografía, época y posteridad*, Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, 1985, pp.162-167.

（7）Zixilanes, "Vita vel gesta sancti Hildefonsi Toletani episcopi", *Patrologia latina*, XCVI, col.48; ; Henrique Flórez, *España sagrada*, V, Oficina de Antonio Marin, Madrid, 1763, p.490: «Aspiciensque in eam sic eum adloquuta est voce: Propera in occursum serve Dei charissime, accipe munusculum de manu mea, quod de thesauro filii mei tibi adtuli; sic enim tibi opus est, ut benedictione tegminis quae tibi delata est, in meo tantum die utaris».

（8）Rodrigo Cerratense, "Vita sancti Hildefonsi Toletani archiepiscopi", *Patrologia latina*, XCVI, col.50; Flórez, *op. cit.*, p.506: «Quoniam mente pura, fideque firma in meis laudibus permansisti; et laudem meam in corda fidelium dulci eloquio depinxisti, et lumbos tuos virginitatis cingulo praecinxisti, de vestimentis perpetuae gloriae vestimentum attuli tibi quo vestiaris in die et solemnitate mea».

（9）Fernando Baños (ed.), *Gonzalo de Berceo, Milagros de Nuestra Señora*, Biblioteca Clásica de la Real Academia Española, III, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 2011, p.18, v.60.

(10) *ibid.,* pp.16sq., v.51-52.

(11) Flórez, *op. cit.*, p.263: «Fue el caso, que desde el año 656 (uno antes del Pontificado del Santo) se decretó en el Concilio X de Toledo, que la fiesta principal de la Virgen (en que concibió al Divino Verbo) se celebrase en todas las Iglesias en el dia 18 de diciembre con toda quanta solemnidad fuese posible. Esta determinación se atribuye comunmente a S. Ildefonso»; cf. Rivera Recio, *op. cit.*, pp.137sq.

(12) Catalina María Valenzuela García, "La festivad de la Inmaculada Concepción en las monjas jerónimas cordobesas durante la Edad Moderna", Estudios Superiores del Escorial, *La Inmaculada Concepción en España: religiosidad, historia y alte, Actas del simposium, 1／4 -IX-2005*, I, Instituto Escurialense de Investigaciones históricas y artísticas, Ediciones Escurialenses, Madrid, 2005, p.96.

(13) Álvarez Díaz, *op. cit.*, p.1225.

(14) Petrus Damianus, "Sermo in Epiphania Domini", *Patrologia latina*, CXLIV, col.508: «Ipsa ex se radium illum emisit, qui penetrat usque ad cordis secreta. Scrutatur enim corda et renes eo quod vivus est sermo Dei, et efficax et penetrabilior omni gladio ancipiti, pertingens usque ad divisionem animae et spiritus, unde et merito congruit ei nominis interpretatio»

(15) Bernardus Claraevallensis, "Epistola CLXXIV ad canonicos Lugdunenses", *Patrologia latina*, CLXXXII, col.333: «Sed et ortum Virginis didici nihilominus in ecclesia et ab ecclesia indubitanter habere festivum atque sanctum, firmisseme cum ecclesia sentiens in utero eam accepisse ut sancta prodiret»; col.334: «Fuit procul dubio et Mater Domini ante sancta quam nata, nec fallitur omnino sancta ecclesia sanctrum reputans ipsum Nativitatis

eius diem»; cf. Marielle Lamy, *L'Immaculée Conception: Étapes et enjeux d'une controverse au moyen âge* (*XII*e-*XV*e *siècles*), Institut d'Études Augustiennes, Paris, 2000, p.155.

(16) Anselmus Cantuariensis, "Cur Deus homo". II, 16, *Patrologia latina*, CLVIII, col.419: «Virgo autem illa, de qua ille homo assumptus est de quo loquimur, fuit de illis, qui ante nativitatem ejus per eum mundati sunt a peccatis. …… Sed quoniam matris munditia, per quam mundus est, non fuit nisi ab illo»; cf. Jean-Louis Benoit, "L'Immaculée Conception. Une affaire anglaise et un grand signe dans le ciel", *Revue théologique des Bernardins*, Paris, 2014, p.56; 古田暁訳『アンセルムス全集』聖文舎, 1980, p.544.

(17) Eadmerus Cantuariensis, "Tractatus de conceptione Beatae Mariae Virginis", *Patrologia latina*, CLIX, col.306; Boniface del Marmol (tr.), *La première apologie du dogme de l'Immaculée Conception. La Conception Immaculée de la Vierge Marie* (*De conceptione sanctae Mariae*) *par Eadmer moine de Cantorbéry* (*1124*), Abbaye de Maredsous, Desclée de Brouwer, Lille / P. Lethielleux, Paris, 1923, pp.39sq.; 矢内義顕訳『修道院神学』中世思想原典集成10, 平凡社, 1997, p.79.

(18) Iohannes Duns Scotus, Ordinatio, III, 3, i; Carolus Barić, *Ioannes Duns Scotus doctor Immaculatae Conceptionis*, I, Academia Mariana Internationali, Roma, 1954, p.7: «Perfectissimus enim madiator perfectissimum actum habet mediandi possibilem respectu alicuius personae pro qua mediatur, ergo Christus habuit perfectissimum gradum mediasndi possibilem respectu aliquius personae respectu cuius erat mediator, respectu nullius personae habuit excellentiorem gradum quam respectu Mariae. Sed hoc non esset nisi meruisset eam praeservare a peccato originali»,

(19) Margarita Llorens Herrero y Miguel Ángel Catalá Gorgues, *La Inmaculada Concepción en la historia, la litteratura y el arte del pueblo Valenciano*, Generalitat Valenciana, Conselleria de Cultura, Valencia, 2007, pp.127sq.

(20) Antoni Riera Estarellas, "La doctrina inmaculista en los orígenes de nuestras lenguas romances", *Estudios marianos*, XVI, Madrid, 1955, p.250.

(21) Robertus Weber (ed.), *Biblia sacra iuxta Vulgatam versionem*, II, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 3.Auf., 1985, p.999.

(22) Luciano Serrano (ed.), *Poema de Fernán González*, Junta del milenario de Castilla, Artes Gráficas Sol, Madrid, 1943, p.75, v.107.

(23) Symeon Metaphrastes, "Martyrium sanctae et magnae martyris Aecaterinae, *Patrologia graeca*, CXVI, col.282.

(24) *Vulgata, op. cit.*, p.1893.

(25) Riera Estarellas, *op. cit.*, p.248.

(26) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.374; ed. 1989, III, p.327.

(27) Constantinus Tischendorf (ed.), *Evangelia apocryhpa adhibitis plurimis codicibus graecis et latinis*, Hermann Mendelssohn, Leipzig, ed. altera, 1876, p.9; Émile Amann (éd.), *Le Protévangile de Jacques et ses remaniements latins*, Letouzey et Ané, Paris, 1910, p.192.

(28) Tischendorf, *op. cit.*, p.57; Amann, *op. cit.*, p.286: «si dedisses mihi filium aut filiam, obtulissem illum tibi in templo sancto tuo».

(29) Tischendorf, *op. cit.*, p.10, 60; Amann, *op. cit.*, p.194, 292.

(30) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.379; ed. 1989, III, p.332.

(31) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.382; ed. 1989, III, p.335.

(32) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.146; ed. 1989, III, p.117.

(33) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.390; ed. 1989, III, p.340.

(34) Tischendorf (ed.), *Apocalypses evangeliae item Mariae dormitio*, Hermann Mendelssohn, Leipzig, 1866, pp.113-123; Aurelio de Santos Otero (ed.), *Los evangelios apócrifos*, Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, 1956, pp.649-685, 687-700.

(35) Mettmann, *op. cit.*, ed. 1964, III, p.393; ed. 1989, III, p.343.

(36) Francisco Pacheco del Río, *Arte de la pintura, su antigüedad y grandezas*, Simon Faxardo, Sevilla, 1649, p.482; Bonaventura Bassegoda i Hugas (ed.), *Francisco Pacheco, Arte de la pintura*, Ediciones Cátedra, Madrid, 1990, p.576.

(37) cantiga 1 : ms.To.1, fol.10ro-11ro; ms.T.1, fol.5ro-vo, pl. fol.6ro; ms.E.1, fol.29ro-30ro; Valmar, *op. cit.*, I, pp.3sq.; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1959, I, pp.4-6 ; ed. 1986, I, pp.56-58; Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, I, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, pp.43-45.

(38) *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María, edición facsímil del Códice T.I.1 de la Biblioteca de San Lorenzo el Real de El Escorial, siglo XIII*, Edilán, Madrid, 1979, p.11.

(39) L'abbé Poquet (éd.), *Gautier de Coincy, Les miracles de la Sainte Vierge*, Parmantier et Didron, Paris, 1857, p.762.

(40) Maricarmen Gómez Muntané (ed.), *El Llibre Vernell. Cantos y danzas de fines del Medioevo*, Fondo de Cultura Econónica, Madrid, 2017, pp.137sq.

(41) *ibid.*, p.32.

(42) cantiga 120: ms.T.120, fol.170ro, pl. fol.170vo; ms.E.120, fol.125ro-vo; Valmar, *op. cit.*, I, p.182; Mettmann, *op. cit.*, ed. 1961, II, p.57; ed. 1988, II, p.64; Laura Fernández et al. *op. cit.*, pp.315sq.

(43) Manuel Pedro Ferreira, "A música no códice rico: formas e notação", Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, II, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011, p.193.

## 参考文献（１）～（５）


Aita, Nella, "O codice florentino das Cantigas de Affonso, o Sabio", *Revista de lingua portuguesa*, XIII, Río de Janeiro, 1921.

Albe, Edmond (éd.), *Les miracles de Notre-Dame de Rocamadour au XII^e siècle*, Honoré Champion, Paris, 1907; complément par Jean Rocacher, Le Pérégrinateur, Toulouse, 1996.

Alcuinus, *Officia per ferias, Patrologia latina*, CI, apud Migne editorem, Paris, 1851.

*Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María, edición facsímil del Códice T.I.1 de la Biblioteca de San Lorenzo el Real de El Escorial, siglo XIII*, Edilán, Madrid, 1979.

Álvarez Díaz, Cristina, "La doctrina inmaculista en las *Cantigas de Santa María* de Alfonso X el Sabio", Francisco Javier Campos y Fernández de Sevilla (dir.), *La Inmaculada Concepción en España: religiosidad, historia y arte*, II, Istituto Escurialense de Investigaciones Históricas y Artísticas, El Escorial, 2005.

Amann, Émile (éd.), *Le Protévangile de Jacques et ses remaniements latins*, Letouzey et Ané, Paris, 1910.

Anglés, Higinio, *La música de las Cantigas de Santa María, del rey Alfonso el Sabio*, 4 vol., Biblioteca Central, Barcelona, 1943, 1958.

Anselmus Cantuariensis, "Cur Deus homo", *Patrologia latina*, CLVIII, apud Migne editorem, Paris, 1862; アンセルムス著、古田暁訳「神はなぜ人間となられたか」『アンセルムス全集』聖文舎、1980.

Ballesteros Beretta, Antonio, *Alfonso X el Sabio*, Salvat, Murcia, 1963; repr. El Albir, Barcelona, 1984.

Ballesteros Mateos, Juana, *El tratado De virginitate Sanctae Mariae de San Ildefonso de Toledo*, Estudio Teológico de San Ildefonso, Seminario Conciliar, Toledo, 1985.

Baños, Fernando (ed.), *Gonzalo de Berceo, Milagros de Nuestra Señora*, Biblioteca Clásica de la Real Academia Española, III, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 2011; ゴンサロ・デ・ベルセオ著、太田強正訳「聖母の奇跡Ｉ」神奈川大学人文学会『人文研究』183号、2014.

Barić, Carolus, *Ioannes Duns Scotus doctor Immaculatae Conceptionis*, I, Academia Mariana Internationali, Roma, 1954.

Bartsch, Karl, *Chrestmachie provençale, X^e-XV^e siècles*, Elberfeld, Marburg, 4^e éd., 1880.

Bassegoda i Hugas, Bonaventura (ed.), *Francisco Pacheco, Arte de la pintura*, Ediciones Cátedra, Madrid, 1990.

Benoit, Jean-Louis, *Le Gracial d'Adgar. Miracle de la Vierge, Dulce chose est de Deu cunter*, Brepols, Turnhout, 2012.

Benoit, Jean-Louis, "L'Immaculée Conception. Une affaire anglaise et un grand signe dans le ciel", *Revue théologique des Bernardins*, Paris, 2014.

Bernardus Claraevallensis, "Epistola CLXXIV ad canonicos Lugdunenses", *Patrologia latina*, CLXXXII, apud Migne editorem, Paris, 1862.

Bloch, Oscar, et Wartburg, Walther von, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses Universitaires de France, Paris, 6^e éd., 1975.

*Cantigas de Santa Maria. Edición facsímile do códice de Toledo*, Consello da Cultura Galega, Santiago de Compostela, 2003.

Carvalho da Silva, Joaquim, *Dicionário da língua portuguesa medieval*, Editora da Universidade Estadual de Londrina, 2^a ed. 2001.

Cejador y Frauca, Julio (ed.), *Juan Ruiz, Arcipreste de Hita, Libro de buen amor*, II, Ediciones de la Lectura, Madrid, 1913.

Chabaneau, Camille, *Les biographies des troubadours en langue provençale*, Édouard Privat, Toulouse, 1885.

Corominas, Joan, *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Gredos, Madrid, 1983.

Corriente Córdoba, Federico (tr.), *Ibn Quzman, El cancionero hispanoárabe*, Editora Nacional, Madrid, 1984.

Corti, Francisco, "Retórica visual en episodos biográficos reales ilustrados en las Cantigas de Santa María", *Historia, Instituciones, Documentos*, XXIX, Sevilla, 2002.

Coste-Messelière, René de la, et Prieur, Collette, *Sous le signe de la coquille, Chemins de Saint-Jacques et pélerins*, Centre Européen d'Études Compostellanes, Paris, 1983.

Davenson, Henri, *Les trouvadours*, Éditions du Seuil, Paris, 1961. アンリ・ダヴァンソン著、新倉俊一訳『トゥルバドゥール — 幻想の愛』筑摩書房、1985.

Dronke, Peter, *Medieval Latin and the Rise of European Love-Lyric*, I, Oxford University Press, 1968; ピーター・ドロンケ著、瀬谷幸男監訳、和治元義博訳『中世ラテンとヨーロッパ恋愛抒情詩の起源』論創社、2012.

Eadmerus Cantuariensis, "Tractatus de conceptione beatae Mariae virginis", *Patrologia latina*, CLIX, apud Migne editorem, Paris, 1853; エアドメルス著、矢内義顕訳「聖母マリアの御やどりについて」中世思想原典集成10『修道院神学』平凡社、1997.

*El códice de Florencia de las cantigas de Alfonso X el Sabio: ms. B.R.20 de la Biblioteca Nazionale Centrale*, Edilán, Madrid, 1991.

Faral, Edmond, *Les jongleurs en France au moyen âge*, Honoré Champion, Paris, 1910.

Fernandes Braga, Joaquim Teófilo, *Cancioneiro português da Vaticana, Edição crítica restituída sobre o texto diplomático de Halle*, Imprensa Nacional, Lisboa, 1878.

Fernández Fernández, Laura, y Ruiz Souza, Juan Carlos (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, 2 vol., Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011.

Ferreira, Manuel Pedro, "A música no códice rico: formas e notação", Laura Fernández Fernández y Juan Carlos Ruiz Souza (ed.), *Alfonso X el Sabio, Las Cantigas de Santa María*, II, Patrimonio Nacional y Testimonio Compañía Editorial, Madrid, 2011.

Filgueira Valverde, José, *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María: códice rico de El Escorial, ms. escurialense*

*T.I.1*, Editorial Castalia, Madrid, 1985.

Flórez, Henrique, *España sagrada, Teatro geográfico-histórico de la iglesia de España*, XXXIV, Oficina de Antonéo Marin, Madrid, 1784.

García Gómez, Emilio (ed.), *Todo Ben Quzmān*, I, Biblioteca románica hispánica, IV, Gredos, Madrid, 1972.

García Solalinde, Antonio, "Intervención de Alfonso X en la redacción de sus obras", *Revista de filología española*, II, Madrid, 1915.

García Solalinde, Antonio, "El códice de Florencia y su relación con los demás manuscritos", *Revista de filología española*, V, Madrid, 1918.

Gicquel, Bernard, *La légende de Compostelle, Le Livre de saint Jacques*, Tallandier Éditions, Paris, 2003.

Gómez Canseco, Luis (ed.), *Alonso Fernández de Avellaneda, Segundo tomo del ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, Real Academia Española, Madrid, 2014; アベリャネーダ著、岩根圀和訳『贋作ドン・キホーテ』筑摩書房、1999.

Gómez Muntané, Maricarmen (ed.), *El Llibre Vernell. Cantos y danzas de fines del Medioevo*, Fondo de Cultura Econónica, Madrid, 2017.

Gonçalves Coelho, José-Julio, *Notre-Dame de Roc-Amadour en Portugal, son culte, hôpitaux et hôtelleries*, Imprimerie Roche, Brive, 1912.

González Jiménez, Manuel (ed.), *Diplomatario andaluz de Alfonso X*, Caja de Huelva y Sevilla, Fundación el Monte, Sevilla, 1991.

González Jiménez, Manuel, *Alfonso X el Sabio*, Editorial Ariel, Barcelona, 2004.

González Jiménez, Manuel y Carmona Ruiz, María Antonia, *Documentación e itinerario de Alfonso X el Sabio*, Universitad de Sevilla, 2012.

Grange, La marquis de la (éd.), "Voiatge a Saint Jacques de Compostelle et a Nostre Dame de Finibus Terre", *Voyaige d'oultremer en Jhérusalem*, Auguste Aubry, Paris, 1858.

Gregorius magnus, "Dialogorum liber IV de vita et miraclulis patrum Italicorum", *Patrologia latina*, LXXVII, apud Garnier fratres, Paris, 1896.

Guerrero Lovillo, José, *Las Cantigas de Santa María. Estudio auqueológico de sus miniaturas*, Madrid, 1949.

Guiraud, Pierre, *L'ancien français*, Presses Universitaires de France, Paris, 6e éd., 1980.

Herbers, Klaus, y Santos Noia, Manuel (ed.), *Liber sancti Jadobi codex Calixtinus*, Edita Xunta de Galicia, Santiago de Compostela, 1998.

Hildefonsus Toletanus episcopus, "De virginitate perpetua Sanctae Mariae adversus tres infideles", *Patrologia latina*, XCVI, apud Migne editorem, Paris, 1862.

Jeanroy, Alfred, *Les origines de la poésie lyrique en France au moyen âge, Études de littérature française et comparée*, Librairie Hachette, Paris, 1889.

Kinkade, Richard, "Alfonso X, Cantiga 235, and the Events of 1269-1278", *Speculum*, LXVII, Cambridge Mass., 1992.

Koenig, Vernon Frederic (éd.), *Gautier de Coinci, Les miracles de Nostre Dame*, I, Textes littéraires français, LXIV, Librairie Droz, Genève, 1955.

Kulp-Hill, Kathleen, *Songs of Holy Mary of Alfonso X, the Wise*, Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, CLXXIII, Tempe, 2000.

Kunstmann, Pierre (éd.), *Adgar, Le Gracial*, Université d'Ottawa, Ottawa, 1982.

Lamy, Marielle, *L'Immaculée Conception: Étapes et enjeux d'une controverse au moyen âge (XIIe-XVe siècles)*, Institut d'Études Augustiennes, Paris, 2000.

Lapesa, Rafael, *Historia de la lengua eapañola*, Gredos, Madrid, 9a ed. 1981; ラファエル・ラペサ著、山田善郎監修,

中岡省治、三好準之助訳『スペイン語の歴史』昭和堂、2004.

Leão, Maria Dulce, "Notre Dame dans la littérature portugaise", Hubert du Manoir, *Maria, Études sur la Sainte Vierge*, II, Beauchesne, Paris, 1952.

Lévi-Provençal, Évariste, *Histoire de l'Espagne musulmane,* III, *Le siècle du califat de Cordoue*, Adrien Maisonneuve, Paris, 1953; éd. Maisonneuve et Larose, 1999.

Llorens Herrero, Margarita, y Catalá Gorgues, Miguel Ángel, *La Inmaculada Concepción en la historia, la literatura y el arte del pueblo Valenciano*, Generalitat Valenciana, Conselleria de Cultura, Valencia, 2007.

López Estrada, Francisco, "La lírica medieval", López Estrada (coord.), *La cultura del románico, siglos XI al XIII. Letras, religiosidad, artes, ciencia y vida*, Historia de España Menéndez Pidal, XI, Espasa Calpe, Madrid, 1995.

Maeterlinck, Maurice, "Sœur Béatrice, miracle en trois actes", *Théâtre*, III, P. Lacomblez, Bruxelles /Per Lamm, Paris, 1901; マーテルリンク著、鷲尾浩訳「ベアトリース尼」『マーテルリンク全集』第４巻、冬夏社, 1920.

Mariño Ferro, Xosé Ramón, *Leyendas y milagros del camino de Santiago*, Ellago Ediciones, Pontevedra, 2011; ホセ・ラモン・マリニョ・フェロ著、川成洋監訳、下山静香訳『サンティアゴ巡礼の歴史 ―伝説と奇蹟』原書房、2012.

Marmol, Boniface del (tr.), *La première apologie du dogme de l'Immaculée Conception. La Conception Immaculée de la Vierge Marie* (*De conceptione sanctae Mariae*) *par Eadmer moine de Cantorbéry (1124)*, Abbaye de Maredsous, Desclée de Brouwer, Lille / P. Lethielleux, Paris, 1923.

Martín Rodríguez, José Luis, "Los milagros de la Virgen: versión latina y romance", *Espacio, Tiempo y Forma*, serie III, Historia medieval, XVI, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid, 2003.

Martínez Gázquez, José, "El uso simbólico-alegórico de los números en el *Planeta* (1218) de Diego García de Campos", *Butlletí de la Reial Acadèmia de Bones Lletres de Barcelona*, L, Barcelona, 2006.

Matsumura Takeshi, *Dictionnaire du français médiéval*, Les Belles Lettres, Paris, 2015.

Melo Neto, Ivo Correia de, "Peregrinos y santuarios en las Cantigas de Santa María", *Temas medievales*, XVIII, Buenos Aires, 2010.

Menéndez Pidal, Gonzalo, "Los manuscritos de las Cantigas. Cómo se elaboró la miniatura alfonsí", *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CL, Madrid, 1962.

Menéndez Pidal, Gonzalo, *La España del siglo XIII leida en imagines*, Real Academia de la Historia, Madrid, 1986.

Menéndez Pidal, Ramón, "Poesía árabe y poesía europea", *Bulletin hispanique*, XL, Bordeaux, 1938.

Menéndez Pidal, Ramón, "La primitiva lírica europea. Estado actual del problema", *Revista de filología española*, XLIII, Madrid, 1960.

Mettmann, Walter (ed.), *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, 4 vol., Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1959, 1961, 1964, 1972.

Mettmann, Walter, "Airas Nunes, Mitautor der Cantigas de Santa Maria", *Iberoromania*, III, Madrid, 1971.

Mettmann, Walter (ed.), *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, 3 vol., Editorial Castalia, Madrid, 1986, 1988, 1989.

Monaci, Ernesto, *Il canzoniere portoghese della Biblioteca Vaticana*, Max Niemeyer, Halle, 1875.

Montaner, Alberto (ed.), *Cantar de mio Cid*, Real Academia Española, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 2011.

Niederehe, Hans-Josef, "Lenguas peninsulares en tiempos de Alfonso X", *Boletín de la Sociedad española de historiografía lingüística*, VI, Volladolid, 2008.

Nodier, Charles, *Légende de sœur Béatrix*, Maurice Glomeau, Paris, 1924.

Nösges, Nikolaus, und Schneider, Horst (Hrsg.), *Carsarius von Heisterbach, Dialogus miraculorum, Dialog über die Wunder*, III, Brepols, Turnhout, 2009.

O'Gallaghan, Joseph, *El rey Sabio, el reinado de Alfonso X de Castilla*, Universidad de Sevilla, 1996.

Ortiz de Zúñiga, Diego, *Annales eclesiásticos y seculares de la muy noble y muy leal ciudad de Sevilla*, I, Imprenta Real, Juan García Infanzón, Madrid, 1677, ed. 1795.

Pacheco del Río, Francisco, *Arte de la pintura, su antigüedad y grandezas*, Simon Faxardo, Sevilla, 1649.

Paz y Meliá, Antonio, "Códices de las Cantigas de Santa María", El maruqués de Valmar (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, I, Real Academia Española, Madrid, 1889.

Pérez Algar, Félex, *Alfonso X, el Sabio, biografía*, Studium Generalis, Madrid, 1997.

Petrus Damianus, "Sermo in Epiphania Domini", *Patrologia latina*, CXLIV, apud Migne editorem, Paris, 1862.

Poncelet, Albert, "Miraculorum beatae virginis Mariae quae saec. VI-XV latine conscripta sunt", *Analecta Bollandiana*, XXI, Bruxelles, 1902.

Poquet, L'abbé (éd.), *Gautier de Coincy, Les miracles de la Sainte Vierge*, Parmantier et Didron, Paris, 1857.

Ramírez Pascual, Tomás, "Los miraglos de Santiago y la tradición oral medieval", *Scripta fulgentina, Revista de teología y humanidades*, V, Murcia, 1995.

Ramírez Pascual, Tomás, "Miragros de peregrinos a Santiago, Edición, traducción y estudio de la narración de varios «Miragros de peregrinos» conservada en un códice del Archivo de la catedral de Santo Domingo de la Calzada", *Berceo, Revista riojana de ciencias sociales y humanidades*, CXLVI, La Rioja, 2004.

Réau, Louis, *Iconographie de l'art chrétien*, III/2, Presses Universitaires de France, Paris, 1958.

Ribera y Tarrago, Julián, "La música de las Cantigas, un estudio sobre su origen y naturaleza", El maruqués de Valmar (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, III, Real Academia Española, Madrid, 1922.

Riera Estarellas, Antoni, "La doctrina inmaculista en los orígenes de nuestras lenguas romances", *Estudios marianos*, XVI, Madrid, 1955.

Rivera Recio, Juan Francisco, *San Ildefonso de Toledo. Biografía, época y posteridad*, Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, 1985.

Rocacher, Jean, *Rocamadour et son pèlerinage: Étude historique et archéologique*, Edouard Privat, Toulouse, 1979.

Rodrigo Cerratense, "Vita Sancti Hildefonsi Toletani archiepiscopi", *Patrologia latina*, XCVI, apud Migne editorem, Paris, 1862.

Rychner, Jean, *La chanson de geste: Essai sur l'art épique des jongleurs*, Droz, Genève, 1955.

Sánchez Silva, José María, *Marcelino, pan y vino*, Espasa-Calpe, Madrid, 1991.

Santos Otero, Aurelio de (ed.), *Los evangelios apócrifos*, Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, 1956.

Serrano, Luciano (ed.), *Poema de Fernán González*, Junta del milenario de Castilla, Artes Gráficas Sol, Madrid, 1943.

Souto Cabo, José António, "*In capella domini regis, in ulixbona* e outras nótulas trovadorescas", Antonia Marténez Pérez y Ana Luisa Baquero Escudero, *Estudios de literatura medieval: 25 años de la Asociación Hispánica de Literatura Medieval*, Universidad de Murcia, 2012.

Symeon Metaphrastes, "Martyrium sanctae et magnae martyris Aecaterinae, *Patrologia graeca*, CXVI, apud Migne editorem, Paris, 1862.

Tavani, Giuseppe, e Lanciani, Giulia, *Dicionário da literatura medieval galega e portuguesa*, Editorial Caminho, Lisboa, 2000.

Tischendorf, Constantinus (ed.), *Apocalypses evangeliae item Mariae dormitio*, Hermann Mendelssohn, Leipzig, 1866.

Tischendorf, Constantinus (ed.), *Evangelia apocryhpa adhibitis plurimis codicibus graecis et latinis*, Hermann Mendelssohn, Leipzig, ed. altera, 1876.

Valenzuela García, Catalina María, "La festivad de la Inmaculada Concepción en las monjas jerónimas cordobesas

durante la Edad Moderna", Estudios Superiores del Escorial, *La Inmaculada Concepción en España: religiosidad, historia y alte*, I, Instituto Escurialense de Investigaciones históricas y artísticas, Ediciones Escurialenses, Madrid, 2005.

Valmar, El maruqués de (ed.), *Cantigas de Santa María de Don Alfonso el Sabio*, 3 vol., Real Academia Española, Madrid, 1889.

Vega, Luis de la, *Historia de la vida y milagros de Santo Domingo de la Calçada*, Juan Bautista Varesio, Burgos, 1606.

Videira Lopes, Graça, *Cantigas medievais galego-portuguesas: Corpus integral profano*, 2 vol., Biblioteca Nacional de Portugal, Lisboa, 2016.

Vielliard, Jeanne (éd.), *Le guide du pèlerin de Saint-Jacques de Compostelle*, Protat Frères, Macôn, 1978.

Vincentius Bellovacensis, *Speculum historiale, Patrologia latina*, CLXIII, Apud Migne editorem, Paris, 1892.

Vogüé, Adalbert de (éd.), *Grégoire le Grand, Dialogues*, III, Sources chrétiennes, Les Éditions du Cerf, Paris, 1980.

Weber, Robertus (ed.), *Biblia sacra iuxta Vulgatam versionem*, II, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 3. Auf., 1985.

Zixilanes, "Vita vel gesta sancti Hildefonsi Toletani episcopi", *Patrologia latina*, XCVI, apud Migne editorem, Paris, 1862.

浅野ひとみ「アルフォンソ10世の『聖母マリア賛歌集』における「巡礼」の諸相（その１）」長崎純心大学『純心人文研究』７号、2001.

浅野ひとみ『スペイン・ロマネスク彫刻研究 ―サンティアゴ巡礼の時代と美術』九州大学出版会、2003.

池上岑夫『ポルトガル語とガリシア語 ―その成立と展開』大学書林、1984.

菊地章太『奇跡の泉へ ―南ヨーロッパの聖地をめざして』サンパウロ、2006.

杉谷綾子『神の御業の物語 ―スペイン中世の人・聖者・奇跡』現代書館、2002.

永川玲二『アンダルシーア風土記』岩波書店、1999.

濱田滋郎『スペイン音楽のたのしみ』音楽之友社、新版、2013.

柳宗玄『サンティヤーゴの巡礼路』柳宗玄著作選６、八坂書房、2005.

## 付記

筆者は2020年にサンパウロ（カトリック聖パウロ修道会）から『聖母マリアのカンティーガ―中世イベリアの信仰と芸術』と題した書籍を刊行した。これは『聖母マリア讃歌集』からいくつかのカンティーガを選んで読み解き、中世イベリアの信仰と芸術の諸相を紹介した一般書である。本稿の記述と重なるところもあるが、本稿は考察対象とした個々の作品について原文を掲載し、文献書誌に関する注記を附して学術論文としてまとめたものである。

# Las cantigas de Santa María, V
# La piedad por la Inmaculada Concepción

KIKUCHI Noritaka

**resumen**

El rey Alfonso X de Castilla y León constituye un conjunto de canciones por alabanza a Nuestra Señora, llamado las *Cantigas de Santa María*. Se trata de una coleción de cuatrocientas veinte composiciones escritas en gallegoportugués, lengua literaria adecuada para este tipo de poesía lírica de trovador medieval. Hay unos códices conservados procedente de la propio escritorio del monarca, anotados en natación mensural, un sistema musical precisa para la época. Además, se aparece rodeado en algunas de las ilusraciones de los manuscritos ricos de las cantigas. Todos estos son legados valiosos de la fe y de las artes ibéricas del siglo XIII. En la corte alfonsí que se reunieron poetas, compositores y intérpretes de distintas culturas contiendo cristianos, muslmanos y judios, formaron parte de la agrupación amante de la ciencia y las varias artes.

Leyendo algunas cantigas escogidas para esto estudio, investigaremos las cinco asuntos siguientes： en el primero capítulo, aclarar un propósito principal de las cantigas, respecto al problema sobre el origen de la lírica europea； en el segundo capítulo, tratarse las canciones que cuentan milagros sucedidos con la intervención de Santa María, haciendo una comparación con las obras coetáneas de la lengua vulgar； en el tercero capítulo, tener como objectivo los versos y las miniaturas del códice en relación con algunos lugares sagrados de la Nuestra Señora y sus romeros de entonces； en el cuarto capítulo, seguir la vida del rey llena de altibajos a través de composiciones autobiográficas； en el quinto capítulo, remontrarse desde el ángulo de la teología católica la fuente del culto popular sobre la Inmaculada Concepción de la Virgen, creído después con entusiasmo en las tierras española y portuguesa.

**palabras clave**：santa María, cantiga, gallegoportugués, música y artes ibéricas medievales, teología católica



原稿受領2022年10月７日
査読掲載決定2022年11月11日